川柳雑誌

麻生路郎★主宰

Pesoi flugas trans la landolimon

★兵士は戰線に！ 我等は銃後に！

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十四年十一月十五日發行 第十六卷第十一號（毎月一回十五日發行）

★最高權威の月刊柳誌・人生勉强の標識燈

190

第十六卷 第十一號

毎月十五日發行

アサヒビール

大日本麦酒株式會社

アサヒビールを飲んで含有滋味を知らぬ人多し

夏のビールを愛飲して秋の味覺、冬の味覺を知らぬ人多し

ひそかにお知らせする所以

——愛飲家の言葉——

のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

楢林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上

第十六巻　川柳雑誌　第十一號

★川柳勇士の隨筆★

木蔭の走りがき

南支　宮岡白峯

砲聲と銃聲との眞只中でペンを取つた。何時か送ることが出來ればとの思ひに、銃後の人達へも永い間、無音だし、何とかしてとの氣持は有つたが、多忙に次ぐ多忙で其機がない。併し、今日は相當鳴つてゐるし丁度、ジヤズの音を聞く思ひで書くこととした。

南支の眞夏も、銃後の反英熱の如く、相當高まつて、百四十度内外と云ふところ、鐵帽に手でもふれやうものなら、火傷でもしさうだ。支那兵を追ひ詰めての眞夏の太陽の下で笑を浮べて、一番面白い亦、一番樂しい時期が目前に迫つてゐる。どうして敵を斃すかと、地圖にバタリ、パタリと汗を落して居る私達も、其點司令室の樣な氣持である。砲聲は最中だ。次は俺達の番だ。日章旗の用意も出來た。

銃を堅く握つた掌には汗が流れてゐる。

やがて、彼方にも此方にも日本軍萬歳の聲がおこる。逃げる人、追ふ人、其姿には各々違つた處があるが同じ樣に流れてゐるのは汗といふ奴だ。先月來創作(川柳)が出來ないのではないが、私用のペンをとる時間がなかつたのだ。

汗と戰つてペンをとられる主幹には濟まないと思ひつゝも、日一日と遲れて九月になり、十月號へはと思つて馬力をかけて見たが多分駄目だらう。

二時間程前休みの内に假眠したら路郎先生の夢を見た。勿論それは柳論だつたそして夢の中の先生が何か書けないかねと云はれたので、丁度、今は砲兵の番となつたので、木蔭を選んで書きかけたがそこへ命令だ。前進だと聞くともう仲々まとまらない。限り無く汗が流れるので兵隊の汗を書かうと思つた。次の汗の準備と云へば變な云ひ方かも知れないが、兵は皆次の前進への準備中である。兵器には日本の油が流れてゐる。

汗と共に部隊長殿と座つた傳令の顔からも、足からも、小谷の水の如く流れてゐる。汗を拭く間もなく前進だ。部隊長曰く「○○は○○へ向つて○○せんとす。」部隊長の口が二三回動いたと思ふと、部隊は○○態勢へと移る。全く其動きは神樣と云へやう、太陽は西へ西へと迫つてゐる。やがて銃後へも屆けとばかりの聲も高々と、軍刀銃劍を光らしてゐる。月光を見ながら前進前進、朝の戰鬪へと征くのだ。斯樣にしてゐると川柳の創作の時間は全くない。

九月の月は詩人に何か求めてゐるかの樣に、支那の月も日本の月も全く變りがない。そして私達の汗も、併し此汗は尊い汗であり、有難い汗である。汗を流す事を忘れた支那兵は夜露に打たれ、太陽に照らされて日の二日も經つたら、種々の虫のために白骨化して來るのだ。斯樣に思つて見れば此汗は意義ある汗と尊い汗と云ふ事になる。

私達は明日の汗も準備し警戒の銃劍を光らしてゐるのだ。

(原稿遲着のため季節外づれの點は諒とされたい。編輯局)

漫畫陣中鏡(2)

中支　北みきを

×月△日
爆撃をながめて戰鬪中の戰友が
「オイ！まるでニユース映畫を觀る樣だナア……」
この錯覺も戰場では尊いユーモアだ

不朽洞句抄

麻生路郎

ごもくばこのある風景へ猫散歩
何處へ行くのか飛行機が三三が九
妹にうまれ千人針へ出る
紙がないと云へば立派な申譯け
米がない砂糖がないと立話

5-14-115

★内外時事★

☆八日から大阪南京間、直接電話が開通した。(十月)

★貿易省問題で外務省紛爭、外務高等官等百餘名辭表提出。(十二日)

☆阿部首相、野村外相は十三日閣議散會後、外務事務當局に提出すべき妥協案作成、十日間にわたる紛爭は政府が閣議決定不動の方針を變更して大讓歩で落着、一齊に提出された。辭表撤回。(十三日)

★專任農林大臣に從三位勳四等伯爵酒井忠正氏が就任。(十六日)

★地代、家賃、價格、賃金に對する九・一八物價の六勅令は十八日公布、二十日から施行。

☆靖國神社臨時大祭は十八日から五日間執り行はれた。

★世界一周飛行の途にあつた大毎・東日機ニッポン號は廿日午後一時四十七分二十三秒羽田飛行場に凱旋

☆歐洲戰亂勃發以來ポンド貨の動搖により政府は爲替基準をポンド・リンクからドル・リンクに變更した(二十四日)

★日本――ブルガリヤ間に廿五日にベルリン經由で國際電話開通、一通話、九十二圓、土耳五十二圓。

☆廿四日來東海、北陸、近畿、中國、四國二府十八縣下、中防管區本年度第四次防空訓練を行つた。

川柳雜誌　十一月號目次

表紙寫眞……(大同・石佛)……岩崎柳路
内外時事……(一)
社會ページ……(八)
武玉川三篇研究(三五)……梅本秋の屋
木蔭の走りがき……宮岡白峯……(一)
街に住めば……高橋かほる……(四)
上海便り……植山九天……(八)
漫畫陣中鏡……北みきを……(一)
川柳解題と例句……路郎編……(四)
朝鮮雜記……弘津柳寔……(三)
AとBの話……福田山雨樓……(三)
月評川柳一ト筋……白面人　夕鐘　某人　丹路　銳亞　孤鈍　蓬秋　春巣　鮎銃　美路　郎……(四)
武玉川三篇研究の卷末に……蛭子省二……(七)
演劇・映畫に川柳を觀る……孤蓬・夕鐘・鮎美……(二)
プロムプター……池澤丈雄……(七)
隨筆(リボンと戰爭其他……小山文三……(二)
貝釦……岡田某人……(二)
忘れられたハンカチ……大西八歩……(三)
月評スナップ……ゑい……(九)
近作柳壇★……麻生路郎選……(七)
川柳塔……麻生路郎選……(二)
同舟近詠……諸家……(六)
不朽洞句抄……麻生路郎……(一)
一路集……森東魚選……(五)
……大島濤明……(五)
……西いわを選……(一〇)
各地柳壇……社關係の人々……(表三)
後記……(表三)
柳界展望……(八)
川柳・協……(一九)
川雜案内……(八)

川柳塔

‖路郎選‖

統制〳〵だまつて日向見てゐたり　　堺　麻生葭乃

指圖するだけのマダムの土いぢり
そも何のうれひぞ海の鉛色
三味線草線路の錆に倦きもせず
高架線ああ料亭の庭せまし
しちごうで軍需景氣の一人降り
夜深し虫のアレグロモデレート
御堂筋スローモーションへつ込んだ
牡鶏が來て鶏頭のまぎらはし

大阪　大西八歩

無量寺へ誘ふ夫こなる白髪
殘すものこては謝罪こ保險金
稲こ芒へ同じ秋風
男前を批判されてる立候補
抱きかへるわづらはしさも他人の子
雜念が夕陽を無駄なものにする

橋本綠雨

~~勇士を思ひて~~

~~敵軍の外に夜の蚊帳の蚊~~
五萬分の一を一歩一歩の歩み也
全山が紅葉でかまぐちこ煙り

笑ふこがなく事變はまだ續く
寢室へ伺ひたてる急なこ
溫泉でみる手の皺に顏の皺
髭を落したり延したり四十前後

大阪　高橋かほる

堺筋畫の茶房へ氣が咎め
五寸程の算盤が出る折り鞄
敬禮を交はす市電の運轉手
小川見るうち急行が二台行き
モンペイはいてみてから縫ひ直し
秋の街牛はまばたきして通り

大阪　奥村丹路

海蒼し蒼し鋭きまで蒼し
幸福の壁音もなく崩るゝよ
子を抱く女ごこやら悲劇めき
物干へ出て女中さん空を見た
八十の御ン顏不平の翳もなし

兵庫縣　寺井鋭々

成功をしてから大言壯語せず
人は行くみな目的を持つ如く
硝子ふこ觸れて冷き病後也
コスモスをじつこ見てゐて日が暮れた
コスモスに音樂習ふ娘が出入
神のまに〳〵赤ん坊動いてる
金策へ靴を磨かぬ日がつゞく

ハワイ　高澤一浪

日の丸の船が這入つた日の丸の
人間こ思ふてくれなこも言へず
男甲斐今宵も莫迦な御客なり
人の慾笑ひ我慾笑はるゝ
金なごを溜めたばかりに取卷かれ

大阪　戸田孤篷

千日前朝だあんまが歩いてる

黒門市場

乳母車狹い市場を狹くする
電車から船場へ降りるシャイロック
帶すれてゐるも働く女こや
隨筆を讀む人の眼がくほんでゐ
ガミ〳〵こ云ふより手のない正直さ
戀女房俺こいつしよに年をこり
金ビカの弔辭聲だけよく通り
ワンタン屋向ふへ曲る辻の雨
藪入が戀受至上（ラブイズベスト）聽いてくる

○

友の戰死

手には銃腹に妻子の寫眞あり

雨の一日

軍事便皆久し振り久し振り
萬歳が君の最後の聲なりし
姑娘よ日本は花も咲くこころ
戰鬪帽後備ですよこ笑つこき

南支　宮岡白峯

パーマネントなさけにふれた顏もせよ

ある人の父の逝去を悼みて

父なき日秋もろ〳〵のうつくしく
病んでゐる髭に秋の蚊まぎれこむ
障子貼りかへて病む身に廣い部屋
秋の雨病めば膝から想ひ湧く

松本　石曾根民郎

兩親の欄に斜線を引く身なり
傘を廻して美貌を意識する
日本に人物のない話する
ハイキング地圖はこゝらで切れてゐる
教室の一番前にゐて騷ぎ

大阪　正本水客

孫抱いた人へ金策身がいらず
ネクタイのひるがへるのも嬉しい日
結納の額をあつさり決めて去に

豊中　黒川紫香

借傘のまゝでおでんに吸ひこまれ
寄附帳に藪蚊べちやこう死んでゐる
茶柱を教へる妻の手が細し

伯父死去

七十年何と最後の呆氣なさ
うたゝ寢の妻は物尺持つたまゝ

大阪府　丸尾潮花

幼稚園までをあまへるランドセル
許しあふ二人おんなじ花を摘み
ハツキリと云へず女工の淡い戀
水蓮の水は動かぬ色を抱き
山吹は春におくれた色で咲き
清水を下る舞妓の帶の柄

大阪　岡田某人

聞いてれば電話勝手なことを云ひ
バガボンド氣質方角なぞ聞かず
丘も秋土鮮かに分讓地
痩せたのが思ひ切りふる唐辛
嘘つきにゆくネクタイを締め過ぎた

秋風へ戀の前科もない男
はじき豆もう次を眼で擇つてゐる
世が世ならと思ふ日があり罫線屋
てつちりと筆太に秋いつはらず

南地花月

ほた何かほたら何かと春園治
三木助の綺麗に扇子置いてサゲ

兵庫縣　田邊由布

祖母と孫飴がとけてる日向ぼこ
實印をきつちり捺して小金もち
十萬の遺産へ實印よごれてゐ
豚ある日つくゞ〳〵裸婦に似てゐたり

尾崎　酒井斗風

強いて他に頼らず夜の齒をみがく
早熟の娘に葉鶏頭は眞赤
こほろぎを愉しむ老母の陶枕
冷遇の噂もよろし稼ぐことしよ

妹七回忌

秋の雲銀の時計がかたみとは

兵庫縣　北川春巣

秋深し廣告通り拔け毛する
ハイヒールのつらさ走れぬ發車ベル
金光さんのお蔭相槌打つて聞き
金一封中味は聞かぬ方がよし

兵庫縣　水谷鮎美

月の下キミとボクとは許嫁
男泣きおんなのまへをはばからず
ペン軸よしばしは俺をやすませろ
子の夢は父に話せるほどにでき
毛絲針顔は話の方を向き
溫度表愛人が來た熱もあり

大阪　姫田夕鐘

父と子のキャチ・ボールは影へ來る
八寶菜べちやらくちやらと言ふて食べ
此の惱み風へ捨てたら輕からう

名古屋　吉田水車

歐洲亂る

打ち掛けし帶も疲れの一つなる
轉宅のあとにへちまの盛りなり
新世帶こうふ一丁もてあまし
洗ひ髪だけはお富と言ふ姿

あらゆる趣味のお稽古場
手はじきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達
松坂倶樂部
會員募集
お稽古種目
◇長磐　◇常津　◇清元　◇小唄　◇鳴物
◇箏　◇尺八　◇舞踊　◇謠曲　◇能樂小鼓
◇ピアノ　◇聲樂　◇書道　◇日本茶道
◇華道　◇洋料理　◇俳句　◇川柳
◇氣學道　◇棋道　◇松坂レコード吹込所
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
御申込はみ
七階　松坂倶樂部へ
電話(代表)戎三〇〇三番
松坂屋
大阪　日本橋

月評 川柳一ト筋

路郎・某人・鋭々・豆秋・鮎美・丹路・亞鈍・夕鐘・孤篷・春巣・白面人・銃人

丹路＝矢張り近作から始めませうか、今晩はメムバーが多いやうですが、誰方か……

某人＝トップを切りませうか

某人提出＝近作柳樽

兒を抱けば妻のかひなの太くみえ

戸田 孤篷

某人＝妻といふものゝ見方に、對して、子供を抱いた場合の妻に今迄、女としてみてゐた妻でなしに母としての別のものを感じた驚き、それが下五の「太くみえ」で非常に力强く出てゐると思ふのです。而も非常に肉體的に……。

鮎美＝此の句は、私もチェックしてゐた句ですが、非常に好きな句です。花嫁時代を過ぎ去つた妻としての夫からみる賴母しい感じが出てゐる。餘韻のある良い句だと思ひます。

丹路＝此の句に對してほめる方の立場から二人ありましたけれどそれに對して何か他の御感想は？

路郎＝勿論佳句ではあるけれども、私等の年輩から見ると、感激がそれ程强くない。これは女とか妻とかの區別、そう云つた感覺が段々歳を取るとにぶつて來るといふ事を自分みづから感じた譯ですが、若い時分、非常に感傷的な句に感心してゐても、段々歳をとるとそれ程の感激を覺えないのと同じではないかと思ふ。

孤篷＝今、先生にすつかり正體をあばかれました。實を言ふと此の句は隣のおかみさんを見て作つたので、それで生命のある樣な眞實味がないのじやないかと思ひます。

某人＝それは構はないと思ふのです。そう固苦しく言ふと人間一人の一生しか出來ないわけです。隣の奥さんを御覽になつて一人の妻と云ふものを新に發見した場合、そこに擴がりがあつてよいと思ひます。

路郎＝勿論、その點はそれでよいのです。餘所の奥さんから眞理を摑むにしても、要は摑み方にある。若い人には格別の感銘を與へた。島田清次郎の小說「地上」を讀んでた時、あゝした感傷的なものに私等も感心しはするが、もつと人生を深く洞察し、經驗した人の作品に對しては更に、より以上の藝術品としてそれを味ふことが出來るのである。例へば漱石の作品の如きがそれである。僕等の年輩になると頭が鈍感になる。少々のことには驚かなくなる。その點から云へば某人氏の反駁は理由がない。同じことを兩面から云つてゐることになるだらう。

某人＝たゞ一寸、「太くみえ」と言ふ敍法ですね、それが常套的な氣がして一寸後へ寄るんですが。

路郎＝それは同感ですね。

某人＝僕は考へたんですけれどね、もつと他の表現法がありそうに見えて見あたらないのですが、言葉の貧困と言ひますか——川柳的にはこんな表現でもよいといふのに安住せず、もつと別の表現を出してほしい。

路郎＝言葉の貧困と言へば、これも二通りある。日本語それ自身の貧困と、作者自身の言葉の貧困と。

某人＝それはありますね。

鮎美＝此の句の文字の使ひ方はよいと思ふ。

丹路＝それ位にして次に……

豆秋提出＝近作柳樽

口重し何時征き何時に歸つたやら

姜 弘龍

豆秋＝此の人の句は、純眞な獨特な句で、目について居りました。この句も何か稚拙な中に獨特な味があります。も少し川柳らしい句に作つて見ようと思つたのですが、これより方法はないと思つた。こう云ふ稚拙の句のまゝ進んで行かれて川柳らしい川柳にせず、獨特の味を出してほしいと思ひます。

丹路＝今、豆秋さんから稚拙の句と云ふ一つの言葉がありましたが、稚拙の句必ずしも川柳精進の最後の目的ではないと思ひます。その點について何か御意見を伺ひたいのですが、この句はこの句で的確に句主が句にしようと思つたものを完成してゐると思ひます。

豆秋＝勿論、まあ技巧と云ふ事は否定しないのですが、この中に如何にもゴツ〳〵した朝鮮らしい味が出てゐるから……。

某人＝今の稚拙と技巧との二つの論は何れ大きな問題と思ふが此の句について考へる事は、誰も考へて居る事は同じだと思つた。そこに一つの面白味もあるし、ひるがへると割合につまらない事もあるんじやないかと思ふ。

丹路＝（路郎に向つて）先生、稚拙と技巧について何か……。

路郎＝稚拙と云ふものは餘り感心したものじやないが稚拙でも捨て難い句があることをしば〳〵感じる事がある。それには眞實味が盛られてゐる。殊にこの句には、今迄選して來た句で類句がないので一寸面白いと思つた。技巧については前から話した事がある。あまり上手な句はとつつきはいゝが、繰返へして讀む程力がなくなつてくる。俗に云ふ天衣無縫、技神に入る無技巧の技巧といふ樣な、それに至る迄の技巧ならば兎も角、技巧が鼻につく程度のものなら稚拙の句でも、眞實味があればむしろその方を尊重したい。此の句もそれに近い。何となく捨難い。

豆秋＝稚拙の句とは吃の雄辯の意味で却つて吃を直さずに、稚拙は稚拙のまゝで可い。此の人には川柳らしい川柳を作らうと努力されない方を望みます。

亞鈍＝今、豆秋氏が云はれたのに贊成、句主が內地人になりきらない樣に……。但し、川柳の表現上に於て（笑聲）

鋭々＝此の句は別段に稚拙と云ふ程の感じはあまりないのです。只この事が所謂人物又は情景が判然すぐに頭に入らぬ憾みがあるので、それが何となく物足らぬ樣な重厚さを感じさせるのだと考へます。

孤篷＝私も此の句を稚拙とは感じません、兎に角、情景の長い時間をこうまでこなした腕前に感心します。

亞鈍＝僕は何と云つてもこの人の句は稚拙と云ふより外ないと思ふ。例へば「何時征き何時に」とか前句の「非凡なり家出失戀」等續けてゐる處など、上手な人が書けば何とかなりそうだと思ふ。

丹路＝先生、何か結びを……

路郎＝今迄云はれた事をまとめれば判斷出來る、あれ以上は僕には考へられない。大體僕はみなよいと思つて拔いたのだからネ。（笑聲）

亞鈍提出＝近作柳樽

末席で子持氣樂な答をとり

山川 富士

亞鈍＝此の句は雜誌を今晩改めて見なほして見付けた句ですが、そのヒントとなるのは先に某人氏の拔いた「兒を抱けば」から得た、此の句も母親の句じやないかと思ふ。然しこの句に表現されてゐる母は孤篷氏の表現した母より年功を經た母じやないかと思ふ。多分子持とあるが一人二人ではなく澤山の子を產んで、然も夕食の後等で母が今迄の過ぎこし生活—現在の生活に氣易い氣持を持つた母を想像してこれを考へてゆけばゆく程日本の母の居所を感じる。

鋭々＝子持ちとある以上は女か、自分か、母か兎に角女の氣持を見たものと思ふ。末席とある以上、普通の食事でなく、澤山の人のゐる或は普通の家でも客をした時だらうと思ふ。

某人＝末席論は鋭々氏に贊成多數の中で見得を拾てた母としての女、それが見える所に此の句の重點があると思ふ。

亞鈍＝僕も自分で先にあゝは云つて居りながら考へを變へかけてゐる、つまり末席の問題—どうもこれを家を放れての宴會だとかの場所での末席とすると

この句は漠然とした句になりはせんかと思ふ。そこで三度考へ直すとこの句主がある子澤山の家庭へ行つて夕食をよばれた時そのよばれた先の家の奥さんを言つた句とも考へられる。

豆秋＝宴會にしても町内の運動會かと思ふ。

鋭々＝寄合ひですネ。

亞鈍＝然し、家庭としての場合にも考へられるが。

某人＝その場合は末席とは言はんよ、端近かと云ふね。

亞鈍＝あゝそうか……。

路郎＝町内會などで挨拶や演說などがはじまると末席の子持連中は上席に無關心で喰べに掛ると云ふ樣なよくある圖です。

丹路＝川柳塔から二三句ありませんか。

孤蓬提出＝川柳塔

說明に聞くお菊井戸畫の月

水谷 鮎美

孤蓬＝大體此の句を見ますと名所の悲哀、つまらなさを鮎美氏らしく表現してゐると思ふ。中五のお菊井戸としてなければ何の變哲もないと云ふ態のものを「畫の月」として此の傳說をまざ〳〵と表してゐる。

豆秋＝「說明に聞く」を「說明を聞く」になるのとは大變な相違で「に」の一字が如何に句の生命を左右してゐるかをしみ〴〵感じさせられます。

某人＝此の「畫の月」は一種のモンタージュとして鮎美氏の用ひられたものだと思ふ。そこで將してそのモンタージュが功を奏してゐるか否か、この句に於ては些か疑問かと思はれる。句に於けるモンタージュは惡く云ふと一つの逃げる手、そうも云へる。それを逃げる手でなしに强調すると云ふところにモンタージュの意義がある。この句の場合では多分に逃げた感じが多い。此の時亞鈍何か言ひかけるを）一寸待てッ――その原因は初めから「說明に聞くお菊井戸」これで一つの文句、次に「畫の月」これで一つの文句、その繋がりが單に羅列された譯で蝶番ひが打つてない憾みがある。こうなると讀者は一體何處から作者の詩情なり心のうちらへ入つてゆく事が出來るんだらうと――表札が二つあつて番地の書いてない憾みがある。

亞鈍＝某人氏の句評は鮎美氏にとつて酷すぎる。この句は鮎美氏のものだらう。前月號の「そんなん氣にしな」の句で鮎美氏の言つてゐる事を見れば判る樣に、病室の中へ陽の光を持つて來ようとしたあのふくらみ――その樣な意味の事を云はれた記憶があるが、鮎美氏の演劇、それも書割が出て來る樣な劇に興味を持つてゐる事からおして「畫の月」は單に逃げるための句だとか、表札云々といつたものじやないと思ふ。

丹路＝今、二人の意見が出たんですが、この「畫の月」は某人さんが云ふ樣にその時には或は畫の月は現實に出てゐなかつたかも知れない、その點では嘘の句とも云へるが、そう云ふ考へを拔いてこの句には鮎美氏のカラーが出てゐる事は否定できない事實かと思ふ。紀行句としては某人氏が云ふ樣にそう神經質にならないでもよいかと思ひます。

某人＝僕をして言はしめれば紀行句にでもそれが欲しい。

丹路＝鮎美氏の個性があり、鮎美氏らしい句で良いと思ふ。

某人＝鮎美氏のオリヂナリテーは買ひます、然しそれが一般の觀賞者に對して、消化性を持つてゐない場合は一應拒否すべきだと思ひます。

亞鈍＝僕は鮎美氏を充分に知らないから、鮎美氏にオリヂナリテーがあるかないかは知らないが、この句丈を見れば、この句にオリヂナリテーがあると思へない。それ丈けに逆說的に言へばこの句は消化されてゐると思ふ。却つて某人氏の評の方が消化されてないよ。しかし、某人氏の評も分りはするが、そう言ふ評でやつつける句は他にあると思ふ。鮎美氏の永年の作句經驗からしてはこの句は動きがつかない、表現法もそのまゝにしてあげたが可いんぢやないかな。

豆秋＝「お菊井戸畫の月」丈でも充分に感じる。

路郎＝某人氏の評が酷であるといふ意見に替成する。「畫の月」丈で鮎美氏の持味が出てゐるといふ事も――「畫の月」の下五が蝶番が外れてゐると云はれたが當らないと思ふ、短詩型の表現では突放したやり方も一つの手段である。こゝの場合では蝶番は外れてゐない。しつくりしてゐて寧ろ芝居氣がある樣な感じがする――非常に嚴重な意味で――この句としては鮎美氏のカラーも出てゐると思ふが少し何處かに臭味がある。

孤蓬＝先生が仰言つた樣に芝居氣、それを活かす爲の道具として「畫の月」はよいと思ふ。

路郎＝恰好過ぎるんだなあ。

某人＝空間的にギャップを感じる。

鋭々＝これはこれでよいと思ふ。希望から言へば何とかしたい。

亞鈍＝僕は畫の月が入つてゐるからと云つても直しようないと思ふ。直すんだつたら鮎美氏の境地から直さなければなるまい。（笑聲）

夕鐘＝私の思ふ「畫の月」は鮎美の心イクオール善人の心とそう見たい、それは屢々これ迄の表現に於て見受けられる。

亞鈍＝それは餘りに鮎美氏を知り過ぎた評である樣な氣がします。

夕鐘＝私は知り過ぎてゐる。

亞鈍＝句を評する時は作者を知つてゐる事は助になりますが作者を忘れた評もあつてよい。作者を甘へさすよりサヂエストする事も必要かと思ふ。それが作者の爲でもあるかと考へる。

某人＝最後に二つの事實の羅列が決して詩にはなり得ない。主觀を綴つたものがどこかにない事には詩として受けとれないと云ふ事を强調したい。

丹路＝時間がありませんから次に進みませう。

春巢提出＝川柳塔

阪急が見えて旅から歸つて來

正本 水客

春巢＝（無言）

路郎＝この句こそ作者を知る人が、よりよく感じる句で、第三者はそれほど共感をしない句だ。大阪在住の人々には色々な感じを與へるが、阪急を知らない遠隔の人にはこの句の作者ほどに强くは感じられない。損な句だと思ふ。

亞鈍＝阪急が見えてゐる事から大阪へ歸つて來た事になるがその大阪を煤煙だとか、煙突とかでなしに阪急を持つて來た事で、この旅人は夜分阪急か、その附近のネオンが見えて來たからと云ふ風にとれて、この句の裏にある、夜分大阪へ入つた人の氣持が判る氣がします。

丹路＝この句に就いては、先生と亞鈍さんとの評で大體盡きてゐると思ふ。

白面人＝こう云ふ事を感じますが、今だつたら判る句で時代がたつと判り難い句については註釋でもあればよいと思ふのですが。

豆秋＝「子のやんちやスフであらうとあるまい」との句なんかネ、後世スフの方が丈夫になつたりなんかして……。といふ譯ですか。

丹路提出＝同舟近詠

妻も子も無事かと月の虫にきこ

渡邊 曉童

丹路＝昭和ビルの事務所で校正を手傳つてゐる時にこの句を見て、葭乃奥さんと矢張り實感の句はよろしうおまんなあと、實際其時はそう感じたんです。句の意味もよく分るし敍法にも無理がないし、おまけに曉童さんを知つてゐるのでそう感じたんですが、雜誌に出てから度々見てゐる間にそうも感じなくなつて來た。こういふ事は屢々あるので自分の句に就いても云へるんですが、何かそこに在來の川柳作法に足を辷り込ます穴があるんじやないかと思ふ。その點に就いて皆さんの意見を聞きたいと思ひます。

某人＝それは能と芝居の區別じやないかと思ふ。能は謠なり又は動作の中に一切の意見を織込んである。芝居では背景があつて、これが非常に役者の演技を助けてゐる。假に背景をとりのけた場合の二つを考へる、そうすると能役者の演技は無背景のまゝでも成立ち得るが、歌舞伎乃至新派の俳優の演技が將して背景の無い又は黑カーテンの前で、どれ丈獨立性を持つか、結局吾々は作者と云ふ背景に多少ごまかされてゐる形がある樣な氣がする。丹路氏の云はれたのはその點ではないですか？

丹路＝初め受けた感激が薄らいでゆくのはこの句丈ではないが、作者が背景でなしに川柳らしさから拔けて作つて行きた

い。

某人＝川柳としての常識から一應外れて見ようと思ふのですネ。

鋭々＝この句について感じられたのは「虫にきこ」と云ふ表現が弱い表現の行き方と感じられたんじやないかと思ふ。そこが川柳的とか作句法とかにあきたらない句になるんじやないかと思ふ。

某人＝こういふ事が云へるんじやないでせうか、ある一人の人が非常に奇拔な、或は優れた句を發表した時、その句の中に用ひられた句語は吾も〳〵と使ふ弊害がある。そしてその句の言葉の持つ色彩といふものを川柳的に定着さして仕舞ふ、その上皆が非常にイージーな氣持で川柳的に用ふ、そう云ふ事が反省されるかと思ふ。

亞鈍＝月の虫か？或は月の、虫にきこか？この言葉と、言葉の意味に迷ふのだが、どう解釋してよいか誰か明快に說明をして戴きたい。

某人＝それは月の夜の虫の聲。

亞鈍＝それで「虫にきこ」が川柳では常套になつてゐるの？

某人＝そう云ふ風な表し方だね。

鋭々＝虫を擬人的に用ひたんでせう。聞ことか行ことかは近來割合に用ひられる、それが弱いと同時にその臭ひが嫌に感じられる、聞きとすれば古くから使はれたもので、聞こで、新しい感じがしてそれが目立つのですね。

某人＝虫に聞きは市内、虫に聞こは新市内。

亞鈍＝それで「虫にきこ」と云ふ言葉が、イージーだとか、弱いだとか云はれるが、それは句としての弱さだとかイージーさの樣に聞えたが、（この時某人何か言ひかけるを）一寸待てッ（笑聲、この處亞鈍先程のしつぺ返しと云つた處）僕はこの場合作者の境地の弱さと云つた風にとつてよいとも考へる。つまり、小兒病的なんだ。

路郎＝この句はこれでよいのです。何故初め葭乃や丹路氏が強く感じて今その當時の感じがないかの原因はこの句の內容です、過去の詩人がこの境地を詩にも歌にも俳句にも感激的に度々作つて來てゐる、それで月並の臭ひがあり、ローマンチックな點があるところから、度々見ると感激が薄れて來るのである。映畫でも初めはよかつたが度々見る程それが減じる。それと同樣にこう云ふ境地は万葉集にもあり、古くから度々何人の懷ろにもあつて、慣れつこになつて來てゐるからである。

（銹人筆記）

同舟近詠

もう藩祖なごに旗出す街でなし　金澤　安川久留美

セバートをつれた銅像未だ建たず

モンペイこバケツ女房でない女

おみくじの凶鳩豆の中へ捨て　兵庫縣御影町　長崎柳秀

エスカレータストッキングが氣にかゝり

噴嚏でもしさうに事務の腕まくり

地均しのロールが淋びし雨の街

歸省してちいさな借を思ひ出し

我がここのやうに仲人氣をあせり

清貧こ云ふが學究口につき

一人位出世しさうな親の慾

荷ごしらへ足らぬ仲にも親心　上海　植山九天

病父に別れて

バットをつけてそれで別れけり

大阪にて

死ぬほご呑めこ肩を組むなり

父の死

葬送のこんぼはすいこ折れてこび

慰問文妻には妻の種があり　廣島　濱田久米雄

除隊こ除隊肩をたゝいて別れたり

秋さびし鼠の穴をふさがされ

慰問文稻はみんなが刈つて呉れ

秋さびし藏書を賣つた話なご　堺　渡邊曉童

秋の雨定期の期日あこ三日

大阪で死ぬ氣に成れこ勵まされ

彼女等の社會

藝で押す氣の歳に成つてる

舞の手ほごきちんばの眞似でないのなり

女學生腹の減るまでしやべるなり

ネクタイは締め直したがつかれけり

大阪ではつきりまけた人を見る

粉藥の袋へ一句したゝめる　今治　長野文庫

案內記此處に在るのが日本一

湯がたぎる雜誌手ひごく投げ出され

轉宅の際に全集一部缺け

押し花が植物學書から落ちた

萬葉が分る女が嫁きおくれ

歩兵須知血色のよい顏で買ふ

體位向上食つて動いて寢るばかり

性の本小聲で買ふは未だ若し

屑買ひが株主名薄買ひかぶり

近作柳樽

麻生路郎選

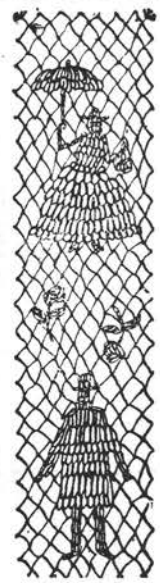
手柄なごないと勇士は笑ふのみ　南支　酒井美知夫
軍事便小供のとしを思ひ出し　同
戰友の寢言は擊つて居る樣子　同
雷は嫌ひと云へぬ銃を執り　同
養子せく娘があり特務一等兵　同
皇軍の歩調纏足又拔かれ　同
慰問團銃後の唄をおいていに　同
學歴を否定して居る特務兵　同
進擊を明日にひかへて入日見る　同
單純な慾なり水が欲しいだけ　同
醉ふて居る軍歌は元へまたもごり　同
勝ちかけた將棋をくずす彈の音　同
二三行睡眠劑となりし文字　堺　麻生アート
醫長さんまだ晝食をやうとらず　同
日向ぼこ猫の頭となつてゆく　同
笑ふもさみし一人缺く膳　同
車掌さん仲間が乘つてちと怠け　同
參拜者牛の如くに連れり　同
親蟹も子蟹も雨にぬれてゐる　同
繪日傘の後が淋しい土堤の道　同
無口ひとり秋の日向に親しめり　同
太陽の熱を感じてゐる無口　同
あゝほそき腕よビタルモン2號　同
茶話會の樣な防護團詰所　同
靖國の遺骨を富士のまごに向け　大阪府高石町　米本貴志子
スマートな蛙は京の夢を見る　同
敷島の道がごうのと鍬は錆び　同
ぶじな日の虫は衰れにきゝ取れず　同
いゝ着物同じ私が差別され　同
昨日まで無產黨首の自家用車　同
一層もう庚申さんの猿でいこ　同
松の雨味ひもせず金のこと　同
黄昏の子に葱つちょが一握り　下關　櫻川不水
盃を伏せて解放待つてゐる　同
家計簿へ寂しき妻のプロフキール　同
主婦として芋の秤りに異議があり　同
眞つ直ぐに歸れば女房一つ燗け　同

肥後づくし

あとの事肝煎りごんになすり付け　同
田原坂踊るあの妓の武者ぶりよさ　同
貧乏もよかたい肩んこるでなし　同
レコードの甘さ女給のわるびれず　愛媛縣大洲町　澤松異天樓
失明の兵も出てゐる月の寮　同
選擧場秋蠶の匂ひつけてくる　同
轉がして音を樂しむ貯金箱　同
麻雀は當分質屋へおくつもり　同
颱風のうらを蜻蛉はとんでゆく　同

歐洲大戰勃發

戰爭のない宣戰へ氣が疲れ　同
人生とは何ぞや息子ませてきた　廣島　石原伯峯
生命線書き足してみる病む少女　同
照れ臭いここは英語で書く手紙　同



プロムプター

池澤丈雄

岡田某人氏は、面白い事を云ふ人である。市河三絲の隨筆みたいで、內田百間の琴みたいである。しかし、小生は三絲の隨筆も、百間氏の琴も知らない。

×

東京生活漸く一年と少し。上京當時は、山が見えないのと、大阪辯が聞けないのと、もう一つ或る事とで迚も淋しかつた。「大阪料理」となる食べ物屋を片端から首を突つ込んで歩いた。しかし、みんな「大阪風料理」であつてお負けにありやゝ？と思ふ程高いので、もうこんな事は止めにした。

うな井と聞いてまむしの味がせず

×

私は「家出」のミスプリントだと說明したが、會社の同僚はどうしてもそれが呑み込めず「巡査だもの、種々な事情があつて坊主になると云ふので、一々あゝ、あゝと話を聞いてやつてゐるんだよ」と、主張して譲らなかつたが、翌月號の正誤訂正を見て此の人情說はダメになつた。

×

正直な話、大阪當時、私は「川柳雜誌」の內容を殆んど讀んでゐなかつた。柳界展望と編輯後記位だつたかな？

×

此の頃は雜文は大抵讀む。仲々面白い。雜文作家と云ふものはおいそれ、と眞似の出來ぬ難しいものなのに、その割に威張れない。損なものでいつかの川柳雜誌で「曾根崎署あゝ、出家かと云々」の句があつたが

かくなりし身は女ゆへ女ゆへ　同
卒業前やたらに寫眞撮すなり　同
子を抱いて朝の景色へ養子出る　京都　伊藤入仙
後ごりもなく六十の競馬好き　同
なにをする人ぞ洋裝よく似合ひ　同
先祖から傳はる隅に鼠の巣　同
セットしたけば〳〵しさに出そびれる　同
小きざみに歩みめぐまれないをんな　松本　小宮山雅登
さても秋花なき壺のほこり拭く　同
蒼穹は青しむほんぎなご忘れ　同
ワルツはさむかろ枯葉のうたゝ舞ふ　同
ハイカーがあわてゝ避けた療養所　名古屋　清見松夢
電髪をさせぬ夫の坊主刈　同
親のない女工金にもならず生み　同
初戀を同伴席に少さく居　同
マスターも丸刈にして日本主義　大阪　山川富士
鰯賣眞晝の街を走るよう　同
胡瓜もみ隣へ知れる音になり　同
板圍ひビラ貼るように出來てあり　同
蚊帳の中妻は貯金の話する　大阪　西尾栞
道問へばひどい吃りでありにけり　同
廻診へ趣味の話も出る機嫌　同
ヒットラー近い近所ゝ云ふを知り　廣島　近藤須彌浩
其の金齒冷たく笑ふ未亡人　同
其んな嘘妾しはこうから知つてます　同
下宿屋の娘は今年六ッです　同
一理窟述べて末ッ子寢てしまひ　尼崎　飯尾寄與史
ハイキング停におぼれた歩きよう　同
寢て貰ふ智慧ある猿に似る心地　同
バビリオがごうのこうのゝ四十すぎ　同
日本犬國產ゝ云ふ意氣で征く　同
佛壇の掃除銅貨の一二枚　愛媛縣大洲町　米澤曉明
遠雷へもはや女の落ちつけず　同
日給の何はさておき米を買ひ　同
遠方の聲も家の子隣の子　同
慚愧に絶えんなどゝ家では呑んで居る　同
秋の夜だタッタ一人で居て見たし　松山　芝田靈子
留守の戸を煙草をつけてあきらめる　同
街角を細く廻るもさびしき日　同
訪れば噂ほどなき家に住み　大阪　松枝靜波
生花へ流儀が違ふ母ゝ娘の　同

競馬

喧嘩して持て來た金ゝ馬知るや　同
鼻の差が穴ゝなつたる二百圓　同
息切れてソガリ巨きく見失ふ　同
レールあつて廣さ迷はず汽車走る　朝鮮　姜弘龍
洪水が秋にも濟まぬ廣さ持つ　同
罪はみな二號に着せて破產なり　同
惡口は聞いてゐたのか寢返りし　大阪　平川久枝
逢つた日を數へて見てる日記帳　同
バスガール公休日には客で乘り　同
無遠慮を賣物にして箸をとり　下關　中村九呂平
應召へ母は佛間に端坐せり　同
案外な御布施に南無阿彌陀佛が出　同
養生は學年遲れさす心算　今治　石手向上庵
クキ〳〵ゝ洗ふ瀨戸物耳によし　同
秋深し隱居炬燵で種を撰り　同
手紙に書いて葉書に書いて出さず　大阪　山本葉光
男だ！說明が邪魔くさい　同
待つゝ言ふ女の强さ有難し　同
孫も出來故鄕見限る肚を極め　布哇　前山北海
遂負けて月賦で背負ふ冷藏庫　同
戰雲へ二世忠誠探ぐられる　同
歡送の御禮背丈けのゝこへ貼り　奈良縣肥田町　嶋田翠峯
見知らない客へ無口な散髮屋　同
散髮屋將棋初段の腕を持ち　同
停年へ近づく椅子のかけ心地　岡山　鈴木九波
口ほごに釣れぬ同志で釣つて居り　同
柿ひゝつならぬ木許り孫の代　同
生きてゐる姿を秋の水に見る　大阪　森本秋子
東京へあしたは歸る荷をまゝめ　同
太陽をまゝもに見たは十二、三　同
休溫計はさんだまゝで雜誌讀む　名古屋　鈴木可香
甜められた無念しみじみ若さ知る　同
空想は果てなし鯨汐を吹く　同
夕燒へたゞ何ゝなく祈つて見　大阪　夷一笑
菊ほめてお茶をよばれた赤だすき　同
張板が垣根に並ぶ菊の花　同

ある。

×

だから私は、注文があつても雜文は書かない。隨筆と書いておく。するとそれが活字になると雜文と化けてゐる。まゝならぬ浮世ではある。

×

「川柳雜誌」は新聞紙法の刊行物だから、それを生かして使いたいものだ。例へば「川柳時評」欄を設けるとか何とかして。此れは、釋瓢齋居士か池澤樂居大人へ賴めば、大抵書いて呉れるだらう。

×

「大同石佛」の表紙を五ヶ月續けて見てゐながら、右隅に麻生先生の居られるのをやつと今月發見した。成る程、大きな佛さんである。

×

夢が怖いと眠れぬ夜を
起きてゐる

某人先生、此の句の意味がお解りですか？

（十、十）

上海便り

上海支部　**植山九天**

郊外の朝から花賣りが續いてゐる。日本のそこいらにざらにある木にこれは內地では見た事もない赤い實（鬼灯の樣なもの）が配置よくなつてゐる。花賣りの一人をつかまへて得意の支那語？でひやかしてみたら他の人のは枝に實をさしてあるのだとしきりに云つてゐる。見くらべたらなるほど木は違つてゐるが實はどれもこれも同じだ、で其奴のを引張つて見たらこれも枝にさしてあつた。

明月には支那人のだれもかれもが一夜中がや〳〵と話してお月見をする。外がやかましいので寢られたものでない月餅も賣りに來る。この日は朝から一日休んで月見の支度をする。私の會社も休日（仲秋節）になつてゐる。

月評會スナップ

＝ゑ　い＝

秋の夜の淸水町、ふらんす茶房の二階と云へば、先づ靜寂さを感ずれども、表はまだヒッキリなしに堺筋の電車と自動車の音が交錯してゐる。しかし室內は句談雜談で、和やかなアトモスフヰアが立罩めてゐる。

×

本日の此會場の世話役の孤蓬子、早くから着到、片隅の卓子で一人夕餐、洋食で御飯、二十三貫の大肥的、「たつた一皿で足りますかね」と銳々子問へば、「いや、ライスを此通り二人前です」と孤蓬子顏の汗も拭かずに又パクつく。

×

路郎師來場早々、バットを二つ買求め、閉會までに又二つ。結局一時間に一つの劇合となる之でも少い方なり。

捨てられる氣配へ猫の目が潤み　京都　福田丁路
金貯めて孤立に生きる顔の皺　同
合掌の心を亂す消防車　同　西野みづほ
落人の俺へネオンの明るすぎ　廣島縣竹原町　同
代用品銃後はかくも戰へり　同
言ひ分はあれど病人眼をつむり　朝鮮　弘津柳慶
久し振君が飲むとは知らなんだ　同
もぢ〳〵と結局俺に拂はす氣　同
金賣つた心晴々と歸つて來　大阪　寺尾破衣
百合の花病人だけの息をきき　同
金策に行くとは見えぬ青切符　同
職人の手箒身體中をはき　大阪　古寺謙南坊
履歴書は不平に滿ちた社と知らず　同
兒の寢顔のぞき夜食の膳につく　同
チンドン屋雨に逢はない傘で來る　大連　松井物數寄
アルミ貨の手應へ金と思はれず　同
血壓を氣にする頃に金が出來　同
御婦人は巧に笑ひ方を變へ　海拉爾　小川靜觀堂
爭へぬつながり矢ッ張り血なりしか　同
主義と思想つかずはなれずはなれてる　同
喰つたがさて勘定はお前しろ　堺　麻生リリ
にらめつこふと蟹の顔思ひ出し　同
賽錢の足りない罰か風邪をひき　同
蟹のためお酒を買ひにゆかされる　同
洋裝を市場で見れば下駄をはき　大阪　靜岡ちか子
飯台をのけて末の子歩かせる　同
旅の酒冷氣を感じ切りあげる　東京　田中青風

映畫「感激の頃」より

良緣へたゞ不甲斐なき兄がゐる　同
女と女、五年前の事へ泣く　兵庫　增元甲陽
拜啓の次を書く間に蚊が五匹　同
チンドンヤ見てもらひたひ歩きぶり　長野縣上田　佐二木千隈
芝居よりコンバクトの顔見てかへり　同
性格を流した如しペンの跡　布哇　長谷川猿吉
甘たるい仲を養母は氣に入らず　同
罰金は覺悟か荷物高う積み　大阪　津路紅多呂
競賣に佛壇あつけなくも賣れ　同

俺怠期けさは磨きの足らぬ靴　ホノルル　古川風竹
虹　同
プリズムに虹の原理が小さくゐる　兵庫縣　戸倉普天
逆うてみたが結局社を追はれ　同
乘つてから、老眼鏡を忘れたり　島根縣　尼綠之助
性格をわびしむ負碁となつてゐる　同
里の母つまらぬ映畫見に出かけ　同
一人來た河原に惜しい月がありぬ　愛媛縣大洲町　片岡曉夢
ばあさんの樣にたんすも古くなり　同
食堂車ビールの泡へ海が來る　大阪　岩崎水虹
丸刈が半分延びて秋の戀　同
一すじの百合にもにたり我が心　大阪　今西湖秋
二人ゐて淋しき思ひ萩の道　同

友重篤

泣顔を見せてはならぬやつれやう　大阪　丸島利生

汪兆銘

筆談へ涙の光る眞劍さ　同
目方では負けても內の子は歩き　大阪　山岡鐵水

チブス饅頭事件

チブス菌チト手加減が過ぎました　同
角砂糖仲よく二つ溶けてゆく　尼崎　奥田綠水
汗と泥拭うてはてしないくらし　同
木炭車堺筋にて火を起し　大阪　石田沐天
支那へ行く今日の別れにノッポ來る　同
親切は金が目當であつたのか　大阪　富岡巨人
離合する車掌同志の擧手の禮　同
洋裝の母らしくなく抱きあげる　大阪　並木南風
ハイキング靴のかがとを見つけられ　同
相談へ智慧はいらない金を見せ　大阪　堀毛一龜
更生の友へ期待が多すぎる　同
アンコール答へぬスター涙ぐみ　大阪　駒井月都
ボーナスを貰ひ無口もついしやべり　大阪　藤川鈴峯
ぐつすりと眠るは金を持つてゐず　下關　多田市多樓
落伍して俺もやつぱりスプかいな　尼崎　江口正路
胎教の事で亭主に叱られる　大阪　靜岡忠八
律義者借る時だけは嘘をつき　大阪　佐々木指洋
受付で最一度聞けば指を差し　大阪　藤森小雅子
特賣へ安いときめた女の眼　下關　東方司半休
自惚れて左遷妻子を里へやり　堺　野島神樂

×

鮎美子詰襟に折鞄携帶で來
着曉童子の隣の椅子に席を占
める曉童子の横にも折鞄あり
債務者會議に出席といふ形だ
ねと誰かゞ云ふ。すると路郎
師、差詰め債務者顏は某人君
あたりかナアと。適評々々の
聲に某人子頭を搔く。

×

亞鈍子右の耳に耳帶を當て
た銃人子を同伴で來場。「僕は
今日は朝から兩耳がガーンと
鳴つて具合が悪いから、筆記
を銃人君にやつて貰ふつもり
で一緒に來たのだ」と云ふ。
耳の悪い者の代理に、又耳の
悪い者がアッシスタントとは
、こりやよつぽどオモロイ。
三つの耳で、ミミミは何か酒
落にならぬものか。

×

開會より前、丹路子が亞鈍
子に、耳が鳴るのは飲み過ぎ
ぢやないかと、慰問的揶揄を
發すると、亞鈍子「いやそん
な事はない、飲み足らぬ故か
も知れぬ。某人君一ぱい飲ろ
うか」と忽ち一隅の卓子へ某
人子誘はる。

×

月評座談に入り、司會丹路
子白面人子へ提出句を促す。
白面人子曰く「私等には、こ
ういふ席上へ來ると、よく判
つてゐた句が混亂して判らな
くなり、又判らなかつたのが
啓發されて判つたりするので
どれを提出すべきかに迷ひま
す」と。すると亞鈍子「それ
は君が偉いからサ」と判つた
やうな判らぬやうな斷定を與
へる。「それだから提出して論
議研究すれば自ら明瞭になる
事になる」と路郎師ピリ・ヨッ
ドを打たれる。

×

鮎美子の作句「お菊井戸」
の論評の際、孤蓬子の推奬論
に對し、某人子酷な程の否定
說を述べた後「かほるさんな
ら、鮎美さんにはえらい濟ん
まへんけどといふ處ですね」
に一同大笑ひ。

……いのちある句を創れ……

川柳雜誌社　梅田支部句會

★日時　十一月十五日（水）夜六時
★會場　カナメ喫茶店階上（電話南七五五一番）
心齋橋筋大丸百貨店ヨリ南へ二辻目ヲ東へ半丁
★兼題
「全快」（五句）……麻生路郎選
「松茸」（五句）……高橋かほる選
★會費　一〇錢
★呈賞　天位（各題）に粗品を贈る

主催　梅田支部
後援　川柳雜誌社

幹事、秀峰・靜波・斗風・由布・鮎美

案內狀は差上げませぬが奮つて御參席下さい

川柳人協會主催 ★ 大阪朝日新聞社會事業團後援

同情週間

師走川柳大會（第三回）

▼鉛筆持參の事

川柳を作らない方も出席して歲末の川柳味を味って下さい！

新東亞建設のため皇軍破竹の戰捷は國民擧つて感謝するところである。銃後の私達はいよ／＼皇軍の武運長久を祈ると共に歲末に特に惠ぐまれざる人々のことをも考察しこゝに本協會は第三回師走川柳大會を開催し、出席者の會費全部をそれ等の惠ぐまれざる人々へ贈ることゝした。オール川柳人の來援を切望する。

日時 十二月二日（土）自午後六時至十時（時間嚴守）

會場 大阪朝日新聞社三階大廣間 ▼なるべく靴又は草履のこと

司會者 中西おさむ

文藝映畫「○○○○」上映六時○五分—五五分 映畫を題材として川柳を創作すること（須崎豆秋選）

挨拶 川柳人協會理事長 麻生路郎

兼題 「石炭」「神樣」「蔭膳」 川柳雜誌社 昭和川柳社 松坂倶樂部 橋本綠雨選 小川百雷選 川出美根子選

「勘違ひ」「戰友」「餅」 とのみ川柳會 阪大川柳會 三越川柳會 好崎申仙選 長崎柳秀選 栗原空栗選

▼締切 十二月一日午後十時着・各題二句・各題別紙・住所氏名明記の事

▼投句所 大阪市西區江戸堀上通二ノ四六番地昭和ビル 川柳人協會宛

「　」川雜支部代表 西いわを選 「　」蟷螂川柳社 河野夜王選

「　」有恒川柳會 寺井鋭々選 「　」鶴橋川柳會 梶文葉選

席題 川柳人協會・名譽會員 堀口塊人 川柳人協會・名譽會員 村田周魚

講演 批評は親切に演壇に立つてから？

會費 金五拾錢 各地の出句者は兼題と共に小爲替參拾錢又は貳錢切手拾五枚同封のこと。入賞句呈賞（會費同封なき句は選者に廻送せず）

賞品 ▼天地人五客へ呈賞、各題天位へ副賞として大阪朝日新聞社より記念品贈呈。出席者全部に粗品呈上 尙吉例により諸大家寄贈の揮毫作品を出席者に抽籤にて呈上

記念撮影 希望者に實費で頒つ

大會委員（順序不同 敬稱略）

路郎 丹乃路 路郎 路路 白い鮎 村 申 光 形 水 路仙 句面 わ 美 茂人 を 夢夕 由 裡 鐘 朴 塊人 堂 小 は 柳 る 子 を 松 園 文 葉 鋭 々 お 布 さ か 曉 む 斗 ほ 童 水 周 魚 客 風 双 落 五 至 風 る 柳 葉 虎 丁 一 藝 南 瑠 濃 悟 紫 秀 潮 緣 雨 花 禎 一 白 黃 路 郎 香 八 童 波 柳 波 孤 子 篷 寄 豆 青 九 里 卿 樂 よ よ 四 王 美 史 秋 兒 滿 十 九 百 江 し 路 根 平 子 八 青 歩 一 葭 雷

▼大會に關する御用件は 大阪市西區筑前橋電停前 昭和ビル二〇一號室 電土3333・8163・8164

主催 **川柳人協會**

後援 **大阪朝日新聞社會事業團**

★ 戰線へ銃後へ笑爆を送る快著！

新川柳評釋

麻生路郎著

本書は本誌に連載され名評釋として好評嘖々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕妙さは日本柳壇に於ける著者の獨壇場である敢て薦む！

★ 四六版上質紙フラ綿一四〇頁

★ 定價八十錢 送料六錢

朝鮮・滿洲・臺灣・樺太・鮮 その他外地八十八錢

麻生路郎序・石井白面人編 川柳人の一代（絹版）賣切

麻生路郎著・柴谷柴舟漫畫 川柳漫畫 累卵の遊び 特價八拾錢 送料九錢

麻生路郎序・阪大川柳會編纂 川柳句集 大川端 頒價壹圓 送料九錢

麻生路郎序・橋本綠雨著 川柳句集 街の雜音 定價五拾錢 送料六錢

「川柳雜誌」合本（菊版時代） 一部壹圓半 送料卅錢

「川雜投句箋」 一冊十五錢 二冊廿五錢

序・百田宗治・麻生路郎 著・高鷲亞鈍・裝幀田村孝之介 隨想集 詩人複眼（近刊） 限定版定價壹圓 送料六錢

堺市出島町一五三番地 發行所 不朽洞

振替大阪三〇三九二番

演藝・映畫に川柳を觀る

映畫「土と兵隊」

原作　火野葦平
脚色　笠原良三　陶山鐵
監督　田坂具隆
撮影　伊佐山三郎　横田達之

玉井伍長…小杉勇
清水大尉…山本體三郎
坂上上等兵…井染四郎
工兵中尉…見明凡太郎
小林伍長…伊澤一郎

火野葦平軍曹の「麥と兵隊」に續く第二作「土と兵隊」は筆者自ら分隊長として奮戰してゐるだけに戲曲的であり、映畫的である。

斷片的なニュースの眞實性を除いては我々銃後が期待し得る最大迫力を持つ一億國民必見の作品である。

小杉勇はじめ十數の俳優はその他數百千の登場戰士と見境がつかない位芝居をして居ない。それでゐて百パーセントの効果が上つてゐる。

田阪監督は又前作「五人の斥候兵」で試驗ずみの手堅い手法を更に大規模に繰返して「海ゆかば」のリズムに乘つてトップタイトルが溶明する。（戸田孤篷）

泥んこの渚へ散つた決死隊
白骨をせめて凱旋さすつもり
小休止勿體ない程すてられる
泥鼠ナイフではがし手ではがし
泥の進軍分隊長を見失ひ
子の聲が鯖雲からきこえて來
分隊がとにかく揃ひ笑ひ出し
戰死者の擔架は霧へ消えて行く

戸田孤篷

水運へまだ生きてゐた俺だつた
最初の最後となる手紙のありは
乘艇開始海岸線は雲低し
よくも歩けたものだと豆を見て
ゐる
番號一、二、三、四今日も無事
だつた
捧げ銃茶毘の煙が立ち昇り
水リレー野天風呂へとつゞくなり

姫田夕鐘

映畫「殘菊物語」

原作　村松梢風
演出　溝口健二

配役

尾上菊之助…花柳章太郎
中村鶴助…高田浩吉
尾上松助…高松錦之助
尾上多見蔵…尾上多見太郎
尾上菊五郎…河原崎權十郎
お徳…森静子
中村芝翫…嵐徳三郎
菊五郎女房お里…梅村容子

悪口を聞くにたえないランプの灯
風鈴を買つてふたりの氣がまぎれ
停車場のマント姿の別れなる
旅の雨歸るところもなく暮れる

水谷鮎美

女將の世辭に憂鬱が込み上り
大阪の假寢の宿で妻となり
果大鼓二階は愛の巣とはなり
完成したこの作品から思はぬ
收獲がある。それは森赫子の
好演た。殊に明治物の得意な
溝口健二の演出と新派の花柳
章太郎の三つの藝魂が一つに
成つてゐるのがまざ〳〵と感
じられて嬉しい。今ひとつは
何れの場合にもクローズアッ
プのなかつたことに好感が持
てる。（水谷鮎美）

女人新生

六年前に不圖した迷ひから二人の子供と夫を捨てゝ出奔した不貞の妻が夢寢にも忘れ得ぬ故郷への思慕と今は見違へるばかりに成長してゐるであらう瞼の子供達への愛着から長い放浪の果て歸つて來る。長い間、求めてゐた幻は實現した。妹娘は自分を母として慕つて呉れたが、姉は冷酷な母親に冷酷な態度で應じて頑強に母を否定する。

此の愛憎の岐路と嵐のさ中に立つて懊惱煩悶する、さうした女を岡村文子が演じ、姉を川崎弘子、妹を高峯がつきあつてゐる。この姉妹にトラブルを起させる青年に夏川大二郎が一役割りこみ、岡村と若い娘たちの調停に奔走するといつたら、筋は大方想像が着く。

麻生素女

ソプラノの妻を覗いた舞台裏
一切れのパンも黄金の夢となり
過信する黄金を嗤へぬさび

覆水盆に歸へらず故郷へ來つれども
戀のはかなさ血のつながりへひざまづく

麻生不死鳥

人の世は母をゆるさぬ姉娘

映畫 黄金の夢

水谷鮎美

しき灯

十月の歌舞伎座

日柳燕石

雨の鞘橋

姫田夕鐘

土産物兄の匂ひのするお菊
三人片輪

偽物と知らず片輪を召抱へ
盗人に鍵を預けし面白さ

双蝶々曲輪日記

嬉しさは南方十治兵衛の聲となり
母の氣も知らず十手を取りなほし

「東京ブルース」

戸田孤篷

ブルースが終りハイカー草に寢る

映畫 その前夜

姫田夕鐘

友禪を洗ふながれへ京の街
父娘して飲む盃のさびしすぎ
新選組のリンチ首が飛ぶ也
血なまぐさき空氣をよそに將棋
さす
屍を抱く乙女姿の哀れなる
藝術意慾屍を描きつゞり

高瀬止血科醫院
特科——
レントゲン・紫外光線
高瀬志可
東區内北濱心齋橋筋角
電話 東四四二九番 北濱一九二三番

貝釦

岡田某人

＊

薄靄がかゝつて、沼が青い鉛色に鈍んで、ひと色にぼやけてゐる森の、わづかな切間から病院の灯がとひとびに見えはじめて來た。博士と私は默つてその方へ沼べりを傳つてゐたが、突然異樣な物音に續いて、大きな翼のあるものが、月をかすめて飛び立ち、大きな弧を描いて灯の方へ遠ざかつて行つた。——何です。と私がきいた。——えゝと博士は曖昧な口ごもりをした。私はあんまり不意だつたので、それ以上きくほどの氣持がまだ起らぬまゝに、森の中へ細い徑をすかしながら辿つたのだが、眼前が展けて建物がすつかり近く見える樣になるまでに數回にわたつて不氣味な羽音をきいたのであつた。しかも羽音が、森や沼の方と病院の灯の方との間に、往つたり來たりしてゐることに氣がついたが、それがどんな鳥だかは、どんよりとした月光だけでは見きわめることが出來なかつた。然し、たまたま病院の前庭まで來た時、私は聲を上げんばかりに立ちすくんでしまつた。

一體あれは何だ。病室の窓枠に一つとまつてゐるその姿、ふくろふに似てゐて、しかも身體全部が醜惡な顏の形になつてゐる……と、室内からもれる比較的明るい燈火をうけた半面で見ることが出來たのだが、それも或は見ちがひではないか、それは判然とはしない。それを見極める前に、その不思議なものは窓枠から離れて、一度芝生とすれずれまで降りたかと思ふと、急に又空に飄け上つて、Vを描いて森の方へ失せてしまつた。——驚かれるのはあたりまへです。と博士が云つた。——何です。私は今度はのつぴきならぬ氣持ちで博士に向つてきいた。——よくはまだ判らないんですが、さあ何て云つたらいゝか、夢、いや病氣と云つた方がいゝでせうか。博士は考へ深さうにゆつくりと云ふのだつた。——ではあいつが人間にとりつくために病氣が起るんですね——いやそれは違ひます。人間が病氣になると彼奴が出來るんです。——と云ふと。——つまり、病人の妄想といふか、病氣だ病氣だと思つてゐる一種の自己催眠的な氣持ちが、時を經るに從つて凝固してゆき、おしまひにあゝいつた形をとつて、半ば病氣そのものとは別に成長して、勝手な行動をとりはじめるのではないか、といふのが私の今までの結論なのですが、何分相手が相手だけにもう一つ確然としたところまでは行き兼ねてゐるのです。といふと、多分、では何處にでも居さうに思はれるでせうが、事實そんな事は他所で

隨筆

小山文三

リボンと戰爭

近頃若い女の子等が髮飾りに、リボンを附ける事が流行りかけた樣である。

日露戰爭頃には此リボンが大流行を極めたもので花柳界は素より一般家庭に深くしみ込んだものであつた。

當時の小說魔風戀風のヒロインが長振袖に紫の袴を裾長に着けてハイヒールならぬ女靴に自轉車のペタルを輕げに踏んで、上野の春の薰風にマガレット卷の下げ髮につけた派手なリボンをなびかせつゝ、音樂學校に通つた情景は當時の若い學生達の血を湧かせずには措かなかつたものである。

ひさし髮や、二百三高地卷やマガレット卷やお下げ等が隨分長く續いたが東京大震災後には女の髮の型も著しく男性的なものに變つてしまつたので、逐次リボンなぞ顧みられなくなつたが、支那事變も二年間を迎へて又々リボンが百貨店や、小間物店を賑はせてゐる樣に成つて來て、リボンと戰爭とに一脈の因緣がありそうに思はれるのである。

前にも初めは巾のせまい、小さなリボンから後々巾の廣い大きなリボンに移つて行つたが、今度も、今では目立たぬ程度の小さなリボンが流行つてゐるらしいが、遠からず大きなリボンが用ひられ、遂には大きな縞のリボン等が表はれる樣になつてリボン全盛の歷史を繰り返す事であらう。

前に流行つた頃には人絹がまだ日本には無かつたから、總て天絹即ち生糸であつたし、木綿のリボンなんか光澤がなくて使ふ者もなかつた。

今度は人絹計りで天絹なんか恐らく探しても絕無であらう。

同じリボンでも昔と今は天と人との相違がある譯である。

着物の柄

序でだからもう一つ流行の事を書いて讀んで貰ふ事にする。

婦人の着物の色目と柄行は年々歲々派手になつて拾年前の大柄が今は中柄で通つて居るし貳拾年前の若い娘さん向の大柄が今は餘程の年寄りでない限り、顧みてくれない樣な凄じい變化である。

筆者が二十年前に作つた洋服を初老を過ぎた今日其儘に着てゐても決して派手ではないし三十年も前に使つたネクタイの柄物が今日でも未だ幾分のジミさを感ずる位だから獨り女の着物だけではなく、男の洋服の色目柄行にもはげしい變遷があるのである。

凡そ着尺物の色目が行詰つて來ると黑色が流行り初めるし、柄に行き詰ると縞や筋や縞物が流行り出す事は專門家に聞くまでもない事である。

支那事變前には女物の色目、柄行に幾分の行詰りを見せて黑系統の色目が目立つて來たし、縞や、縞筋の柄が流行し初めたが、爾來漸く銀糸や金糸を織り込む事に因て其單調さを破り、其淋しさも消し、更に若手の明朗性をもたせて、聊新規軸を見せてゐたのであつた。

然るに支那事變後殊に今年の秋冬の婦人向着尺物には飛んでもない著しい流行の變化を見せて、いとも勇敢に、いとも明朗に、これでもか、これでもかと言ふ樣な大きな壓力を感じさせる樣な超々大柄と濃厚な極彩色が流行してゐる樣である。

例へば着物の右半身は大きな矢絣模樣であるのに、左片身は御所どき模樣であつたり、右の色目が黃系統であるのに左半分は臙脂色の着物だつたりして、まるで柄の違つた反物二つを縱に繼ぎ合せて仕立てた樣なのがあるし、又盆位の大きな模樣がところどころに染め拔いてあるのを、四十近くなつて、平氣で着て歩いてゐるし、千紫萬紅とり〴〵に繪の具の皿のあらん限りを使ひ儘した樣なコテ〳〵の柄に愉悅を感じてゐるのもある。

以上、まるで赤、青さま〴〵の長襦袢が白晝公然、街頭に押し出した樣な、あくどい大柄の流行は筆者をして彌か上にも顰蹙せしむるものがある。

私は敢て世の流行を追ふ婦人方に御敎へする。婦人方よ先づ御自分の娘の着物と其柄を比べて試て下さい。

そして尙大柄を望まるゝならば日の丸の旗を着物にして軍國調の尖端を誇つては如何……こんな立派な大柄はまたと再びありませんから……

一四——一〇——一四稿

はないらしいのです。それではこの病院に限つて何故そんなことがあるのか、といふ事になります。それは、一つはこの病院の性質と、もう一つ、この方が第一なんですが周圍の事情にあるのです。都會の灯の海のうしろに、山越しになつた擂鉢型の谷赭土の荒けづりな壁で都會の方に背をむけて、前は森、そのむかうにいくつもの沼、しかもどういふ加減なのか、月夜といふといつでもこんな骨梨地、沼と森とのあちらは低いへりで向ふ側の平野へ落ち込んでゐる。絶好の背景じやありませんか。私が繪描きか詩人なら只は置かないんですが、相憎相憎。しかも相手が妖かしの一種なんですからどうにも論文にもならないじやありませんか。は、、、。

その時だ。沼の方から舞ひ戻つて來たひときわ大きい一羽が、窓から入らうとする氣ぶりを見せて、翼を高く立てたまゝの姿で、ふつと吹いたやうに消えてしまつたのだ。まるで今の博士の笑ひに飛ばされたとしか思へぬ消え方で。——あ。あれは、あの消えたのは病人がよくなつたんですか。——いや、と博士は頭を左右して、あれは、あんな消え方は、明日又一臺靈柩車が裏門をくぐるといふことなんです。

※

君が藝術家であるためには、君は決して君の「我」を捨ててはいけない。反對にそいつを砥ぎにかけることだ。それから君は「莫迦」でなくてはいけない。決して有用な人間にならうなど夢にも考へてはいけないよ。

※

昔なら——

紅梅——女官。この頃よく笑ふし、かと思ふと、片えくぼで考へ込むこともある。

べに椿——七條河原で首を切られた内に交つてゐる。

今なら——

紅梅——町の技藝女學校へ通つてゐます。許婚が東京の農大へ行つてまして、三日にあげず手紙をよこします。

べに椿——飛白のモンペ。だが年頃はあらそへない。これで案外結婚してしまふと目立たなくなる。多產。

※

Sata Special Klinik

呼吸器病科

診療 毎午 日前

醫學博士 佐多愛彦 北 38

醫學博士 加藤謙一

醫學博士 螺良四郎 ツブラ 常磐 1151

内科

市電堂島中町停留所北辻西入

佐多醫院

大阪堂島北町 電北八二八四

Aと Bの話

福田山雨樓

元大學の野球選手で鳴らしたことのあるA氏に、身體の弱いB君が「矢張り運動で鍛へた身體でなくては駄目ですね」と愛相を云ふと、A氏は強く首を横に振つて

「いや、一概にさうはいへませんよ、僕の弟など十一秒を切つてゐたのですが、二十代で亡くなつてしまひましたよ」

サラリーマンロードを歩き乍ら、僕はしんみり聞いてゐました。

朝鮮雜記

弘津柳慶

妓生

ニッポンを紹介するには、フジヤマとゲイシヤガールであるように、朝鮮と言へば、虎と妓生であるが、虎はもう北の方に姿を消して全然姿は見せないが妓生の立膝に、アリラン〳〵〳〵アラリヨを歌はしつゝチヤング（太鼓）を叩かして、溫突（寒いので座敷はなく、火を炊いて部屋を溫めるようにした家）に一夜を明す情緒は得難いものがある、妓生學校を卒業した妓生ならば墨繪をよくし、墨や竹を書いて巧れるし又、書も上手に書いて座興を添へて巧れる、修養も積んでいて、昔の花魁を思ひ生させる。

朝鮮漬

一體に寒氣の強い朝鮮では、辛い物を喜ばれ、唐辛で眞赤になつた、お菜をシーシ言ひ乍喰べている、ニンニクも常食であり、先づ朝鮮に住めば、朝鮮漬の味に、舌鼓を打つと言ふより辛さにフーフー言ひ乍もやはり毎食なければ食慾がなくなる。純然たる朝鮮漬になると、金がかゝるし、金持の一つの表示見たいになる、白菜に、魚、牛肉栗、梨、リンゴ、唐辛、人蔘、等々が入るのであるが、普通の家ではそれ程でもないがそれでも漬物丈には金を掛ける、内地人は口に合ふように唐辛等を減らして造つている。

忘れられたハンカチ

大西八歩

秋も立ちたる九月中旬、東舞鶴驛の大時計は乘車時刻にまだ四十分位間があつた。年中旅鴉の僕はベンチでの行——出張員に取つて驛のベンチで長い間汽車を待つのは實際に苦行の一つである——にたえかねて線路にそうて驛前を左に折れて歩みを運んだ。二丁餘り進んで行くと踏切の手前に辻地藏があつて小さなお堂の中で溫顏に慈悲をたゝへた地藏樣が行きづりの旅人を慰め顏に立つてゐられる、その前に捨犬らしい赤毛の犬が一匹うずくまつてもの淋しそうな瞳で尾を振るのもいじらしい。

三年程前に一度やはり時間待ちで、このあたり迄足をのばした事があつた。たしか時候も九月中頃の樣に覺えてゐる。

辻地藏旅の心に親しまれ

こんな句がその時にふと浮んだ。いはばこの地藏樣とは二度目の對面である。秋空がはてのはてまで澄み渡つて向ふの山と空の境界線がはつきりしてゐて黃金色に染めた稻田の上をもう時季おくれの赤とんぼが一匹、二匹飛交、ぴふのも鄉愁がわく。ズボンのポケットから取り出したハンカチで驛の柵に落ちてる煤煙を拂つて腰をかける。秋草が道の兩側に茂つてゐて、人通りとて餘りない向ふから年老ひた巡禮が一人、秋風のそれに似た姿で來り去るのを現實と違ふ何處か遠い他所の國の事の樣にながめ乍ら句想にふける。

犬も溫もる秋の陽の中

こんな句をノートの端に書きとめて、さつきから僕の方乍り見てゐる犬に一瞥をあたへる、生魚を食べてる精か、所々毛が拔け落ちてゐて、身體の色艷も惡い。

秋草へ來て捨犬の氣がまぎれ

そう〳〵以前こんな句を作つた事があつたけ。場所は北陸の大聖寺あたりだつたと記憶してゐる。

そういへばその時の犬の顏が目前の犬に似てゐた樣に感じる。

いや捨てられるとみんなこの樣な淋しい顏形になるのかも知れない。とりとめのない事を考へてゐるうちに、ふと時間が大分經過してゐるのに氣が付いてあはてゝ立ち上ると驛の方へ急いだ。發車五分前に乘車した僕は發車ベルを聞いたとたんにさつき腰を下した柵の上にガーゼのハンカチを忘れたのに氣がついた。その品は今春片山津溫泉へ一泊した時宿で貰つたもので、その肌ざはりの感觸がとても氣持がいゝので、ずつと出張毎にポケットに入れるのを忘れないでゐたのだ。しかし今となつてはもういくらあせつても、取りに行くひまもないのだと思ふとよけいに惜しい。僕の乘つてゐた列車が一番後部のハコだつたので列車が踏切を通過する時目先にちらついた、ひろげられたまゝで置き忘れたハンカチの白さが、その夜橋立の文殊の宿で寢る時に又思ひ出された。

考へて見るとおかしなものだ。買へば幾ら純綿の少ない時勢でも、三十錢も出せば買はれる品である。だが半年近くも身體につけてゐると、僕の魂がハ

アベノ橋

創作料理・食堂・食料品

石丸

電話天王寺二八二・五三五・五三六

ンカチにうつつてゐるのだらう。同じ人間同志でも知らぬ相手には無關心な癖に、知人となると寢つかれぬ旅の枕に、平素あまり交際せぬ人の顏でもふと思ひ出す事のあるのは、やはりお互同志の魂がそうさせるのだらうか。

宮津行の汽船の汽笛の響で目が覺めたのは翌朝の七時前だつた。清淨な朝の空氣を吸ひ込んだ僕は、もう昨日の事等きれいに忘れてしまつて、今日のプランを心の中にゑがいてゐた。宿の二階の窓際にすゑられた藤椅子に腰を掛けて、外の景色に見とれてゐると、傘松行の汽船が通る度に、宿の前の運河にかけられた橋の中央が半分程回轉する仕組になつてゐて、曲つた鐵の棒を持つたおやぢさんが橋上にあらはれると、今迄一心に釣糸をたれてゐた人達が、あはてゝ陸地に續いた橋の方へ逃げて行くのも面白い。おやぢさんはその後で卷煙草をくはえたまゝその鐵の棒の先を橋の中程におかれてある螺旋の中に差込んで、右廻りにゆつくりと廻し初める。卷煙草の灰がその長さにたへかねてくづれる頃、やつと船の通れる程橋が開く。するとそれまでちつと待期してゐた船が待つてゐましたとばかり、急にやかましく汽笛を鳴らしながら進行を初める。それを橋の上でもえさしの煙草をまだくはへたまゝおやぢさんは二十年、いや三十年もの勤續をほこり顏に、去り行く船を見送つてゐる。すべてがのんびりしてゐて、橋も人も船も水も皆畫中のものである。

峰山町から又東舞鶴市に引返した僕は翌朝再び驛のベンチに腰を掛けて一昨日のハンカチの事を思ひ出した。どうせ今頃そのまゝにハンカチの在る筈のない事は解つてゐながら、丁度死んだ子の年を數える樣な氣持ちで先の柵の所へ行つて見た。見覺えのある犬が地藏樣の前で、供へられた食物をガツ〳〵とぬすみ食ひをしてゐる。

そばに行つても僕等見向きもしないで、食べるのに一生懸命である。肋骨が醜いまでに飛び出してゐて、むき出した齒が秋の陽に白く光るのも一層あはれを覺えさせる。

柵の上にはやつぱりハンカチなど跡型もなく消え失せてゐてそのあたりに長く延びてゐる芒へ白い秋の風のみが音もなく流れてゐた。

（十四、一〇、八）

街に住めば

高橋かほる

心齋橋の小大丸の前で商賣とはいひながら洗練された器用な手つきでいろ〳〵手づまを見せて心ブラの人の足を止めさせる映畫の二枚目の樣な街の奇術師？が時節柄手づまはあかんのかして今日は賣る物にことかへて炊事手袋を賣るとは憂鬱です。

事務家は待望す
2600年
卓上日記
OS
全國便箋本舗
岡本ノート社
電話 東京下谷608 大阪東518

解題と句例

川柳

路郎編

（9）風呂敷

★現今の風呂敷は古代風呂場に敷いて足を拭ふのに用ひた布である。風呂敷といふ名稱もそんなところから生れたのである。今では方形の布帛で物を包むのに用ひる。

★第二義に、駄法螺を吹く、廣言を吐くことを風呂敷をひろげるといふ。その意味で大隈重信の大風呂敷は有名だつた。

★寛政天明のころに流行した風呂敷頭巾といふのは風呂敷をそのまゝ頭巾にしたのである。

★風呂敷の起原や年代は詳かでない。

風呂敷へその日その日の匂ひする　葉留路

風呂敷が歩いて來たと亭主逃げ　至藝瑠

風呂敷と定めて二人で買ひに行き　二水

そこらまで行く風呂敷は手に卷いて　松郎

風呂敷の區別がつかぬまま返し　久米雄

風呂敷包みに女の素性あからさま　路郎

（10）富士山

★富士山の噴出は有史以前で、洪積期の終りであつたと言はれ假りに尤も短く計算しても十九萬年前といふことになる。百五十萬年前だとも言はれてゐる。

★富士山の出現したことについては琵琶湖と結びつけた話が、昔から語り傳へられ皇代記（鎌倉時代の編纂）といふ本に、はじめて出て來る。それによると「孝靈五年、近江湖水始滿、富士山始出」とある。孝靈五年といへば人皇第七代孝靈天皇の御代である。富士山の傳說は他にもいろ〳〵あるが多くは近江の琵琶湖と同時であるとしてゐる。琵琶湖で沈沒した土が富士山となつてあらはれたといふのである。

★中根元圭は富士山の三分の一で湖水をたやすく埋られるいつてゐる。こんな事を計算したのも面白いが、だから琵琶湖が凹んで富士山が飛び出したといふ說は嘘だといふのだ。

★富士山の名のフジはアイヌ語のフンチまたはウンチヌプリで火の山とか火の女神の山とかいふ意味であると言はれてゐる。

この外、フジは吹息穴の略で火山の意味であるとか、斑白の略で一年中、雪の斑白であることを指すとか、フセの轉訛で器を伏せたやうな形であるとか、いろ〳〵な說があるがアイヌ語說が尤も信じられてゐる。

★フジの語原は別として發音を表はす文字が、またいろ〳〵あつて、布士、不盡、不自、布時布自、富祇、富兒、婦盡、富慈降士、不二、富士、不死、粉陣福地等々數へ切れない。

平安朝の初期から用ひられた「富士」といふ文字が、それ以後の標準になつたらしい。

★富士山は時々噴火してゐる。文獻にみる第一回の噴火は桓武天皇の御代、天應元年七月六日となつてゐる。

★富士山は室町時代以來、永い間、女人禁制の山であつたが明治五年、太政官布告によつて解禁されはじめて萬人が登山し得る山となつたのである。

登山の傳說では聖德太子からはじまつてゐるが、これはどこまでも傳說である。平安朝の末期に、末代といふ僧が大日に大日寺を建立し數百回登山したとか。室町時代を經て江戸時代になると富士の信仰が民衆の間にゆき渡つた。その富士に對する信仰を一つの敎としたのは角行で、角行は富士講の開祖だ。

☆秀麗な富士山へのあこがれから地名や人名や商品などに富士の名を用ひたものは數かぎりなくある。富士見町とか富士見坂富士見酒などがそれである。

★山の姿が富士に似てゐるので何々富士の異名をつけて鄕土のほこりとしてゐる例は內地は言ふまでもなく朝鮮、滿洲、世界の各地にまで及んでゐる。南部富士、津輕富士、伊香保富士、近江富士、伯耆富士、讃岐富士薩摩富士等々々、海外ではスマトラ富士、タコマ富士、南洋富士、イラン士富等々々がある。

★葛飾北齋は千變萬化の富士の眺めをその奇才と名筆によつて描き盡くしてゐる。富嶽三十六景の錦繪と富嶽百景の繪本がそれである。その他文人墨客の筆になる富士に至つては枚擧に遑がない。

☆俚諺では吉夢について「一富士二鷹、三茄子」といふのがある「一富士、二鷹、三茄子、四扇、五煙草、六座頭」といふのもある。瑞夢の順序をいふのだとされてゐるが一說には駿河國の名物をいふたものだそうな。

富士山も見ず新婚は戻つて來　青一路

機上から坩堝の如く富士も見え　筑川

商標の變な所へ富士櫻　方正

富士山が書けて名士の役がすみ　利生

山中湖畔にて

分讓地富士は遙かの空にあり　路郎

貸ボート逆さの富士がくづれたり　同

蘇峰翁邸

雙宜莊墨痕淋漓富士に譜す　同

ゴルフ場富士はクラブの尖にあり　同

募集句

一路集

夕燒　東魚選

夕燒を前に行軍汗を入れ　神樂
夕燒にしばし風鈴音もなし　夢女
登山杖ホーイ〳〵と夕燒ける　靈子
夕燒に鐵路のひゞきつゞくなり　同
夕燒て二人だけなる丘の上　靜波
旱魃へ明日も天氣か夕燒ける　同
夕燒があり野良仕事繪にもなり　みづほ
夕燒へ看護婦さんも淋しそう　同
夕燒の野路遺骨の列靜か　同
夕燒の吾が家へ急ぐ空ら車　同
二階に病んで見入る夕燒　葉光
夕燒の露路へ豆腐屋呼び込まれ　同
夕燒に繪心がある卷煙草　同
戰亂の國を想へと夕燒ける　同
大きな夕陽にも馴れて移民村　松夢
夕燒へ鱗は秋刀魚燒く煙　同
夕燒へ眉描く女給國を戀ひ　同
教會の空夕燒て鐘が鳴り　水虹
貨車の牛鳴いて夕燒暮れてゆき　同
夕燒へ靜かに降りる軍艦旗　潮花
夕燒へ叱られた子の里心　同
夕燒へ向いて米とぐ舟世帶　同
夕燒に愛馬を洗ふ特務兵　破衣
夕燒へ感謝が續く明日に生き　一龜
夕燒の道まつすぐに歸るなり　水客
競馬に負けて歸る夕燒　同
夕燒の二階なゝめの貸家札　同
夕燒に見入る悲みとは知らじ　同
鄉愁へ夕燒殊に赤くえ見　文庫
夕燒へ默然として父歸る　久米雄
夕燒へ一年生の氣が揃ひ　同
夕燒をバックに地藏尊おわし　曉童
夕燒へ水族館を淋しく出　同
夕燒を歌ふ子供に寺の鐘　小雨
夕燒に食卓の顏醉たやう　馨香
夕燒のまだ開墾の餘地があり　市多樓
夕燒の丘に子供は輪を作り　同
夕燒てゐる物干に竿の音　同
斷水のとがつた心夕燒ける　巽天樓
颱風がそれた夕燒美しい　春巢
夕燒の中へ全機が無事歸り　同
夕燒へ泣きたい袂かい抱き　久枝
夕燒へ思ふ事あり家を出る　同
夕燒へ言ふ事もなく二人居る　同
夕燒の稔る故鄉へ汽車が着き　丁路
夕燒の街に弔旗が深く垂れ　同
電燈の光が弱く夕燒ける　鐵水
子供等の瞳へ夕燒は唄となり　同
夕燒を窓に殘し昏れる街　綠水
鍬肩に幸福な疲れ夕燒ける　同
夕燒へ飛行機路を過またず　洋平
待ちかねたバス夕燒のなかに見え　九坡
紙芝居小錢チャラ〳〵夕燒ける　白鷗
夕燒へ子供の影のもつれ合ひ　柳太
華やかに夕燒の中貸ボート　照波
夕燒に村の子供は皆歌ひ　彌生
夕燒の踏切へ待つ顏が照り　九呂平
夕燒に天氣豫報を信じきり　抱逸
工場を顏に夕燒うけて退け　同
夕燒へ四五人同じ唄になり　文庫
夕燒の彼方へ默禱を捧げ　紅多呂
夕燒へまつすぐ道がついて居る　同
夕燒が肢し編隊機の唸り　青風
夕燒へ肩を並べて立ち盡し　北海
夕燒へ吸はれる煙オパラ燒き　同

註＝甘庶を切採り（カチケン）甘庶の收穫前日夕方甘庶の枯葉（オパラ）を燒きカチケンの作業を容易にする勞作をオパラ燒きと呼ぶ。

（軸）賴母もしい影稻架の列夕燒ける
　　誂えたやうに夕燒鐘が鳴り

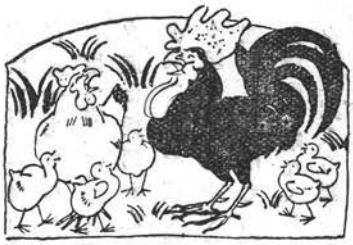
停年　濤明選

停年へもう要のない髭を剃り　九呂平
下つぱの身へ停年の容赦なし　みづほ
百姓に停年は無し鍬を取り　同
停年で惜しまれて去る技術官　照波
停年だ機械よ俺は別れるぞ　彌生
停年の父に酒量が多過ぎる　箱八
非常時は停年制へ棒を引き　同
停年に成つて菊に起き菊にねる　羽衣
停年の机のきずも二十年　白雨
停年が近く盆栽ふえて行き　松夢
停年で未だ雇れる軍需工　抱逸
結局は停年故鄉へ歸るなり　文庫
停年へ樂なつもりの椅子をくれ　白鷗
停年に近く課長の覇氣が失せ　巽天樓
停年のこれからはいる實社會　杢介
欲望などはないと停年負けてゐず　市多樓
停年へ子供の多い事を知り　破衣
停年は花咲く頃かなと思ひ　久米雄
停年のこれから支那へゆくつもり　水客
地方版停年組を惜しむなり　斗風
停年を時局が大目に見てくれる　普天
郊外へ越すプランなど停年期　青風
停年の送別會に醉へぬなり　春巢
敗けぬ氣の汗で停年テニスをし　久枝
停年となつて故鄉の草に寢る　水虹
停年へ萬年青のよいのがふえて來る　紅多呂
大望も最早一年子に讓り　茂治
停年の父はまだ〳〵働く氣　神樂
停年に殘るは貧と子供だけ　夢女
（五）要職にある停年の耳の艶　箱八
（五）停年へまだ總領が小さすぎ　富士
（五）停年は鳥に餌をやる用があり　アート
（五）停年の椅子を後輩ねらひあい　茂治
（五）孫たちに敗けぬ停年鍬を持ち　一龜
（人）柱鏡にふと停年の顏を見る　靈子
評、もう老ひたかと自ら顧る淋しさ
（地）肩書のわびしくゆらぐ停年期　綠水
評、今年の何月は停年だとなると肩書も何となくあつ氣ない
（天）停年へ女房も同じ樣に更け　曉童
評、誰もが思ふ感じであり、苦樂を共にして來た妻への感謝である。

垢　いわを選

遺品なら垢にも感謝の目がうるむ　靜波
垢を氣にして退院の日が近い　鐵水
大陸の垢を落して背伸びする　丁路
退院の垢は半分だけ流し　葉光
白襟の垢が氣になる婦人會　照波
垢ぬけの手で盃が廻つて來　紅多呂
水瓶の垢へ金魚は年を越し　一龜
銀行の窓垢じみたシャツで來る　市多樓
一日を無事に勤めた首の垢　同
先代の手垢が附いゐる家寶　文庫
子の手垢其處此處にある磨硝子　九呂平
外交が上手な友の爪の垢　青風
垢じみた浴衣傑作未だ書けず　曉童
（秀）變誦の頁の手垢白秋集　同
（軸）春の日へ垢でにじんだ手を撫でるいわを

拾月號へ發表の「停年」は選稿延着の爲め本號へ掲載することとした。諒とされたい。（編輯局）



武玉川三編研究

（三五）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(686) **思ひかけなく比丘尼有る町**

秋の屋＝昔の色比丘尼の巣窟は、多く商業地の間に有つた故、思掛けない處で、その家を發見したのであらう。

東魚＝隠れた生業だから、これはと思ふやうな所にある事がある。比丘尼だけに尚ほ更である。

省二＝隠し町などとも呼び、比丘尼はかなり處々に巣喰つてゐた。「比丘の居る路地はどれぢやと淺黄いひ。」

(687) **稻妻の大きく這入金閣寺**

秋の屋＝特に稻妻が巨大なのではなく、金襴燦爛たる高閣に反映して、大きくみえるのである。

東魚＝雄大崇嚴な感のされる處が「大きく」であらう。

省二＝金閣寺でよい。

(688) **高い物買ふ○の相談**

秋の屋＝裸嫁に仕度金を出して貰ふのであらう。

東魚＝或は廓から受出す場合ともとれる。

省二＝「女房」とでもあれば、請出す方にぴつたりはまる。○だから裸の方か。

(689) **二代目からは常の人間**

省二＝初代は名人氣質の畸人であつたが、其子は常の人。

秋の屋＝名人に二代無し、といふ俗諺もある。

(690) **恨にも要はたつた一所**

秋の屋＝恨む可き要點は唯一ケ所と云ふの歟。その意が不明のやうである。

東魚＝恨言をならべた文にも、要はたゞ一に歸する。恐らく「なつかしくゆかしくそして金と書き」の同類で云はゞ「お恨み申し參らせ」のはては金とでも云ふのではないか。

省二＝「金」の件であるか否やの判然とした處は、前句に關聯しよう。句面丈けでは恨のツゞマル所は一つ。焦點は一つの方が強いわけだ。

秋の屋＝東魚君説によると、恨みの要所は金也といふやうに聞えるが、この説は如何であらう歟。但し娘道成寺の文句に「かねに恨みは數々ござる」とある。

東魚＝この場合の要は、金の事であつたと想像したので、（句勢から）、いつでも恨みの要は金だと云ふのでは勿論ない。

(691) **若後家の二言迄は聞ぬふり**

秋の屋＝思はせ振りとでも云ふの歟。三言目には偖何と返事をする歟。

東魚＝聞かぬ振りなどは、却てしてやられる口である。出來ぬのは頭から、ピシリと返事をくらはすであらう。

省二＝二言まで聞かぬ振りするは、若後家らしい情味。

(692) **鳥居からはたしに成ツて願解**

省二＝願解の感謝と歡喜が、中七に現はれて居る。

秋の屋＝願解に跣で百度を踏むので、それは男でなくて女であらう。

東魚＝「はだしになつて」に、姿が躍如してゐる。

(693) **あぶなく見ゆる名人の年**

省二＝多年修養經驗の上の名人だから、相應の年齢には達して居るであらう。あぶなくみゆる姿である。

秋の屋＝「年」は年齢のことで無く、年をとつた名人の容貌を云つたものと思ふ。

東魚＝打見た處の「年よれる姿で」結局は高齢なのであるが、さて業となると流石に年をとつてないと云ふ反面が、うかゞはれねばならない。

(694) **江戸の言葉て借り座敷出る**

秋の屋＝江戸人が上方見物にでも行き、便宜の爲に一時貸座敷を借り、既に見物が終つた故、其處を立出るとであらう。借用する者の方からは、借座敷とも云へぬ事は無い。

東魚＝前に年忘れた座敷を借りると云ふ句があつたと思ふが、これもそれではないか。年忘に座敷を借りて迄大景氣にやるのは、つましい上方人ではない。

省二＝借座敷の句は色々ある。江戸の言葉と斷つてあるから、地理的巨離は欲しい。

(695) **無佛世界の行先に寢る**

秋の屋＝極樂往生などゝ云ふことを、念頭に措かぬ人は、行きあたりばつたりとやらで旅に出ても野に伏し山に寢は、少しも後生に關心しないと云ふ意と思ふ。

東魚＝無佛世界は「釋迦は死し彌勒は未だ生れざる中間をもいふ」などゝ見えるが、要するに前説の如き信仰もないが、さりとて煩悶もない風來坊の生活の姿であらう。

省二＝前二説に贊。不便な未開の地をも亦無佛世界といつた。

(696) **乞食生るゝ松風の中**

省二＝果報者ぢや。羨むべし。

秋の屋＝天を幕とし地を席とする、乞食の境界は全く別天地である。

東魚＝かう詠めば乞食もきれいである。「花の下蔭」などと云ふより、矢張り「松風の中」が置き得て良い。

(697) **新地の夢の覺る引汐**

秋の屋＝滿潮に乘じて猪牙を飛ばして來たが一睡の後には引汐時となり、歸心箭の如しとでも云ふのであらう。

東魚＝新地の遊びも、倦きはてたといふだけの心持ちを、引汐によそへて云つたのではあるまいか。

省二＝さういふ進むだ心境の句であるかもしれぬ、が、例へば深川新地での一遊の夢が引汐頃に覺めると單純に解するのは惡しきか。

(698) **旦那に成つて見たる晴天**

秋の屋＝今迄は他家の雇人であつたが、年季が明けて一戸の主と成つて見ると、晴天白日を仰ぐやうに、精神がはれ〳〵すると云ふのである。

東魚＝前説の如くも解されるが、取卷連中をつれて、散財する場合にもとれると思ふ。「見たる晴天」は、聊か生硬感がある。

省二＝前二説を拜見しても、「晴天」なる措字は苦しい。而し此句に於て最も大切な表現なのである。

＝三編、終＝

武玉川十月號正誤表

頁	段	行	誤	正
八	二	十三	勸へ忍ぶ	塔
八	三	廿八	牢人	（原本には窄）
八	四	十七	下戸と	も
九	二	廿八	直し目	眞
九	四	三	爪綱に	は

武玉川三篇研究の末尾に

……もゞ事の翁屋の秋……

三十五回掲載を以て、一應片づく事になつた。約三ケ年に亘る。これを初編當初から通算すれば何年を要して居るのであらう病弱な私にとつては、よくも生きつるものかなと憶はざるを得ない。

三編は二年位前に原稿となつてゐたもの、病み續きの私が厄介になつて居る爲に、輪講上當然無理が伴ふ。私が机に倚り得る季節でないと着手し出來ないそれは大抵盛夏の候で、一氣にお書き込みを願ひ、其後幾月も休む。まことに感興が斷れ御迷惑であらう事を、恐れて居るのであるが、兎も角、私がやつてみたいといふ氣力の喪せぬ迄は御指導を希はねばならぬ。其上東京大阪朝鮮と地を異にするのも不便である。一句を數度回覽すれば、十分盡し得らるゝのを上記の始末により時間を節約して、先きへ〳〵と急いで頂く方針に御贊成を蒙り、後との事は志を同ふする人々の再檢討にまち、一ヶ月も休まず紙面の容す限り採錄を望むだのである。故に誤釋其他に就ては隨時同志の御意見御發表を期待する。今迄の方法に對し別に御注文もないので、最早第四編も百數十句分屆けた。

森東魚さんのお噂は、本誌上にも度々載るお馴染であるから茲には申上げぬ事とし、梅本秋農屋翁の御世話には、感謝致すべき詞を持合はさぬ。去八月十四日に頂いた御書狀の一節に—（無斷、印刷するを許容致されたい）

『本年は暑氣酷烈にて御病躰の御苦惱御察しまうし上げ候老生事も近頃に老衰の度相加はり足許の悪くなりし爲に外出を差控へ日夜平臥して讀書を專らとなし居れども視力大いに衰へて眼霞みそれも長く續くる事が出來ず只變化の無きは食味にて凡二十年程前より朝雲は飯を茶碗に一杯づゝ晩には飯を廢して清酒一合を用ひまうし候又齒なる故に固き物が食はれず之れには閉口致し候間食に菓子を食ひ胃を害ふことも屢々あり煙草を吸はざる故に甘き菓子を用ひ候去る一月五日安部川餅を食ひたるが咽喉に引掛りて一時窒息なし醫師を招くなど大騒ぎをなせるも頓て恢復するを得まうし候老生の最困難するのハ視力の減退にて原稿紙に一々文字を嵌めて書く事が出來ず雜誌に投稿する時は碁盤目の下敷を作りて白紙に認めまうし候二十一歳の時に近視となり夫より年々に度が加はりたるが今頃は老眼となり適當の眼鏡が無く困り居り候…（中略）…併し人間も七十八十までも生きて後死するハ幸福と云ひて可也と老生は惟ひ候老生なども聊ながら江戸時代の事物を目睹し明治大正を過ぎて昭和の今日の新時代の事物を見聞するを得た事は望外の幸福にてたとひ今夕死するとも遺憾にハこれなく候此上に生きるも可く死しても可しと自ら思ひ居り候只徒に長生を望む餘りに自己の好む食物をも食はず飲みたき物も飲まず攝生のみに懸念するハ愚劣のことゝ存じ居り候…（中略…、蛭子云、川柳に關し有益なる記事をお漏らし下さつて居るが、今暫く發表せず）…此書執筆中俄かに胃部に激痛を生じ大苦ミこれにて擱筆いたし候』

と。翁の御日常を察知し得て尊く思ふ。而て「江戸語考」を始め多くの御執筆に私共は無限に啓發されて居る。實に明治三十三年版「川柳雜句評釋」以前より今日に到る迄、翁の陰德的な御貢献に對して、川柳壇は何にを行つて報恩の意を表したであらうか。同志と倶に反省せねばならぬ。涅槃經に、恩を知るが故に人といふと。謹て御健安御長壽を祈念し奉る。（彼岸入りの夜突如猛發作に襲はれ褥に就きし儘今机に對し端座、翁に面する心持態度に於て認む。十月十一日防空演習下に蛭子生）

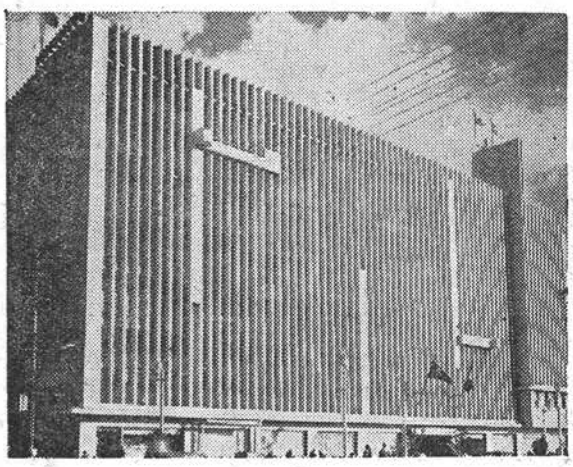
二千六百年の建國祭★★★

紀元二千六百年に意義一層深い建國祭本部では十月六日日本青年館で役員總會を開催、委員長後藤文夫氏、副委員長松下海軍、仙波陸軍兩中將、參與猪狩陸軍中將以下幹事、委員參集して明年の建國祭の事業につき打合せを行つたが、明年の光輝ある二千六百年建國祭委員長には建國祭創始に功勞ある永田秀次郎氏を推薦、同氏の快諾を得、さらに明年の建國祭の豫定計畫として左の事項を決定した。

一、**式典** 靖國神社前廣場を中央會場に他の六ケ所を式場として帝都諸團體が集合、紀元節奉祝、皇威宣揚祈願の式典を擧行、また汽艇を有する水上各種團體、會社などでは芝區海岸通日出橋前で海上式典を擧行、これら水陸兩式典に呼應し民間機も多數參加して前記各式場上空を飛行し空の式典を催す、なほこの日建國祭本部代表者は富士山頂で國旗揚揚式を擧げる。

二、東京府美術館で全國小學校兒童の書方、圖畫、手工など代表作品の展覽會を二月一日から十一日まで開くほか建國祭記念曲の發表、記念記錄映畫の作製などが實施される。

★★★



物價國策に協力する

銃後百貨店『そごう』

大阪 心齋橋 そごう

祝紀元二千六百年

【本欄新設の辯】

内外時事とは又別の方面から社會に觸れた記事をかくことにした。報道と批判と警告を織交ぜて本欄新設の妙味を發揮したいと思つてゐる。

新年御題「迎年祈世（とことをひかへてよをいのる）」

天皇陛下には興亞建設の多端なる時局を深く御軫念遊ばされると漏れ承るが聖戰下に三度迎へる新春皇紀二千六百年の春を壽ぐ宮中御恒例歌御會始の御題を畏くも「迎年祈世（とことをひかへてよをいのる）」と御治定、十月十三日仰出された、興亞の大業に邁進する一億同胞は齊しく畏き大御心を御題に拜して恐懼感激し奉る次第である。

○

詠進の制度は和歌に限られてゐるが私達川柳人は毎年御題を拜して川柳を創作し大御心に答へ奉ることにしてゐる。

殊に聖戰下第三次の新春を迎へるに當つて川柳人はこぞつて御題句に精進されたいものである。

紀元二千六百年　奉祝國民歌當選

來る紀元二千六百年に一億國民が式典、祝典行進などに際して唱和する「紀元二千六百年奉祝國民歌」の歌詞が決定した、當選者および當選歌詞は左のとほり

一、當選（內閣總理大臣賞および賞金一千五百圓）東京市板橋區板橋五丁目、增山好雄氏（光生）

・當選歌詞・

一

金鵄輝く日本の、榮ある光身に受けて、いまこそ祝へこの朝、紀元は二千六百年、あゝ一億の胸は鳴る

二

歡喜あふるゝこの土を、しつかとわれら踏みしめて、はるかに仰ぐ大御言、紀元は二千六百年、あゝ肇國の雲靑し

三

荒ぶ世界に唯一つ、ゆるがぬ御代に生ひ立ちし、感謝は淸き火と燃えて、紀元は二千六百年、あゝ報國の血は勇む

四

潮ゆたけき海原に、櫻と富士の影織りて世紀の文化また新、紀元は二千六百年、あゝ燦爛のこの國威

五

正義凜たる旗の下、明朗アジアうち建てむ、力と意氣を示せ今、紀元は二千六百年、あゝ彌榮の日はのぼる

ビル病の正體

近代都市に櫛比する高層建築物が生み出した文化病「ビルディング病」の正體については從來各種各樣の學說が飛び出し、はたして「ビルディング病」と呼ばれる奇病が存在するものか多大の興味をもつてみられてゐたが阪大醫學部衛生學教室では梶原博士指導の下にこの正體をつきとめるべく過去五ヶ年にわたつて研究の結果、ビル病は近代文化が生み出したものではなくサラリーマンの生活倦怠によるものとみるべきが妥當であるとの結論を得てこれを發表した

柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる樣にしたい皆樣の御通信を歡迎する（編）

催

▼川柳雜誌社は十月三日午後七時から誓得寺で例會開催。▼一日、十五日午後一時松坂倶樂部厩生路郎川柳講座。▼十二日二十六日夜有恒川柳會。▼二十一日夜尼崎住友金屬鋼管製造所親友會句會。以上何れも路郎出席。▼このみ川柳會十月句會は十月一日玉造淸水神具店に於て開催。▼津々良會（京都）では十月十日伊藤入仙居にて例會開催。▼みさごグループ（廣島）では十月十八日鈴木一雄君結婚祝賀句會を同君居にて開催。

消息

▼村松夢裡君（大阪）は十一日から高松、今治、松山、宇和島方面へ出張され、「英靈と汽船に別つ部屋と部屋」の句信を寄せられた。

▼阪大川柳會の柳秀長崎博士は台北に於て開催される第十三回日本藥理學會へ出席された。

▼大窪文芳君は堺を引き揚げられ一應松山へ落ちつかれた由。

▼蛭子省二君は彼岸の入りより病褥にあり、持病の發作に苦しんでゐられる由、なほ左眼を痛められて讀書困難との報に接した。

▼長野文庫君（今治）は今次事變發生以來故鄕のニュースを細大もれなく輯錄した印刷物を前線勇士に送り大歡迎を受け、既に二十三信に達してゐる。

▼月原宵明君（北支）は○○省討伐戰完了後多忙の爲め手紙をゆつくり書く事も出來ぬとの報に接した。

▼大西八步君（大阪）は一ヶ月に二十日も出張といふ多忙な旅先から句を寄せられた。

▼石手向上庵君（今治）は風邪のため業を休んで居られる由一日も早く御本復をお祈りする。

▼台北川柳會は改組の結果台灣川柳社と成り近く柳誌發行されるとの事事務所は塚越正光君の宅に置かれる。御發展を祈る。

書け一斉に
全国便箋

▼奧富天作君は九月二十日宇品發二十六日上海着、二十九日植山九天君を訪問せられた「煙草輪に吹けば故鄕の山や川」九天「先住と聞違へられぬ髭で來る」天作

▼愛媛川柳社から事務所での初句會の寄せ書を戴く虻の麿、漫寄せ書きが屆いた。

▼風間花瓔君（東京）は適齡檢査を機會に句集「二十四の髯」を發刊された。

慶弔

▼矢野虻の麿君（松山）は九月十七日長女を儲けられ前田五健君の命名で惠子と名付けられた

▼山本耕一路君（松山）は九月二十日女子を儲けられ曉美と命名。

▼近藤南毛子君（松山）も女子を儲けられた。

▼古田八百子君（小樽）は兼ねて病氣療養中であつたが、十月二十日逝去された、謹んで弔意を表する。

▼寺川信君（寶塚）は十月十三日逝去された謹んで悼む。

轉居

▼奧富天作君は上海市閘北民德路華中鐵道株式會社技術部工務課へ。

▼宮內耕朗君は松山市湊町一ノ八七へ

▼近藤藤花君は大阪市住吉區昭和町東一丁目十八番地へ。

▼渡邊曉童君は堺市出島町六〇三へ。

▼掛飛吉宣君（岡山）は召集解除となり、岡山市門田鶴卷町九五へ。

金麩羅
御料理
梅月
大阪 御靈筋
電北濱二三七九

★社告

▼左記三君が新に不朽洞會に入會された。

布哇　高澤一浪君
大阪　戶田孤蓬君
大阪　石井白面人君

川雜・案內

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し前金切手代用可）
改號、移轉、句會案內柳書廣告、その他

川柳しなの
一部拾五錢　一年一圓八十錢
松本市大名町
しなの川柳社

京
一部十錢　一年一圓（稅共）
京都市御幸町松原上ル
發行所　京都川柳社

東海の代表誌　川柳草薙
一部一〇錢　一年一圓（郵稅共）
名古屋市南區八熊町寺田
發行所　草薙川柳社

川柳きやり
菊版每號六十數頁
每月一日發行　一部廿五錢
東京豐島區高田本町二ノ一四六八
川柳きやり吟社

月刊川柳　みちのく
一部十五錢　一年一圓五十錢
靑森縣黑石町　川柳みちのく社

川柳大陸
一部二十六錢　一ヶ年三圓
大連市仲町九
川柳大陸社

川柳伊豫
一部拾錢　一年一圓廿錢
松山市南柳井町五九
愛媛川柳社

春聯
一部二十錢　一年二圓（稅共）
大連市薩摩町一六一森崎方
春聯川柳社

柳友
一部拾五錢　一年一圓八十錢
東京市杉並區和泉町八四
柳友會發行所

大阪府の議長問題

十月十八日、改選後初めての臨時大阪府會では議長副議長の選定すら容易に決せず、休憩又休憩遂には掴み合ひをはじめて醜態を天下にさらした。あつけにとられたのは淸き一票を投じた府民諸君だ。そんな筈ではなかつたがと云つても、もうおツつかない。もう一度改選して眞に聖戰下にふさはしい新議員のみを選出しなければ國民精神總動員が泣く。

夫婦喧嘩をさす廣告？

十月六日の大阪朝日のラヂオ版の狹い圍ひの中に、二つの廣告が掲載されてゐる。一つは酒ぎらひになれる方法を奧さんに知らせるといふ廣告で、一つは酒の廣告である。

幽芳先生古稀祝賀

「己が罪」や「乳兄弟」で賣出し新聞小說界の大先輩として關西文藝界に偉大な足跡を印せられた菊池幽芳先生の古稀祝賀會が十月十八日正午、大阪倶樂部に於て開催され、菊池先生の懷古七十年と佐多博士、大毎の平川淸風氏、大朝の高原操氏等の挨拶があつて頗ぶる盛會であつた。

二科展と泰西名畫展

來る十月廿八日より十一月十四日まで大阪市主催の下に第二十六回二科美術展覽會並びに第二回泰西名畫展（十一月末迄）を大阪市立美術館に於て同時に開催する。

節米で燒芋驛辨

京都驛に名物「燒芋」の代用驛辨が十一月一日からお目見得して國鐵の驛辨節米運動の先鞭をつける——節米はまづ「旅」から强調すべく十月二十八に日開會の全國鐵道局旅客課長會議で驛辨の節米方法について協議をしたが、大阪鐵道局ではそれに魁けてまづ代用辨當として燒芋に目をつけ、名物として知られてゐる京都祇園丸十商店と鐵道弘濟會とをタイアップさせて本月一日から京都驛で賣出し、その成績を見たうへ管內主要各驛で賣出すこととなつた「やき芋辨當」は籠詰めとし一籠二十錢、やきたての熱さがいつまでも冷めないやうに包裝してある。

チブス饅頭公判

カルカン饅頭の上にチブス菌を流して病、死者を出した女醫廣瀨菊子（三九）の第一回公判が十月五日神戸地方裁判所で開廷菊子は「あの人は冷たい利己主義な人です」といひ、佐藤博士は「菊子は夫を夫とも思はぬ女です」と云つてゐる。

第二次の公判は六日に開かれた。青木裁判長の訊問は「醫學博士の學位を獲得するために女の力まで借りなければならない必要があるか」「證人は醫學博士といふ名譽ある人だのに自分の家內の行儀のわるいといふ病癖を矯すことができなかつたのか」「醫博といふ位置は學術が優秀なだけでは下されないのだらう人格をも考慮にいれるのだらう」。と眞綿で首を締めるやうな而かもすこぶる皮肉を發散させてゐる。七日には坂井檢事が何人をもうなづかせる秋霜烈日の如き大論告を下してゐる。菊子は無期徽役——佐藤博士は？

協・川

★師走川柳大會の日時決定

前號で豫告した川柳人協會主催大阪朝日新聞社會事業團後援の同情週間師走川柳大會は來る十二月二日（土）午後六時（時間嚴守）より大阪朝日新聞社三階大廣間に於て開催に決定した。

☆師走川柳大會準備委員會

同情週間師走川柳大會の第一回準備委員會が去る十月二十二日（日）の午後一時から淸水町電停前のフランス茶房階上で開催され、川協會員の各吟社、各會の代表者等が、大會の選者、兼題餘興、大會委員其他について協議決定した、案內遲着のため當日出席不能の委員等へはそれぞれ報告贊同をもとめた。

★十二月二日の師走川柳大會では午後六時開會を宣するや直ちに、文部省推薦の文藝映畫「〇〇〇〇」を上映し出席者一同はこれを題材として川柳することとなつた。

★大會出席のため周魚氏の西下本協會の名譽會員で、柳誌「きやり」の主宰、村田周魚氏は師走川柳大會出席講演のため十二月二日來阪され大會終了後、不朽洞に一泊の豫定である。なほ本大會の講演は村田周魚（東京）と「昭和川柳」の堀口塊人（大阪）の兩氏が斯界のため獅々吼される事となつた。

☆御誌の誓文拂

十一月二日の川柳雜誌社の例會では午後四時から本協會後援の下に柳誌の誓文拂を開催し、柳人のため柳誌欠本の渴を醫することとした。物資愛護の國策にも沿ひ、頗ぶる人氣を呼び東京からの出品などもあつて、近頃珍らしい興味ある催として歡迎されてゐる。

☆川柳人協會員を募る

會費　半年　一圓六十錢
　　一年　參　圓

申込所　大阪市西區江戸堀上通二ノ四六　昭和ビル

川柳人協會

振替大阪三一五一四番
理事長　麻生路郎

この喜び
慰問品を戰線へ

なつかしい、故國の便りと慰問品ほど、兵隊さんに喜ばれるものはありません。何も彼も、不自由な戰地へ早く、暖かい慰問品を送りませう。

六階東館・慰問品賣場

大阪 三越

毎月曜日休業

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

路郎・豆秋整理

本社十月例會（大阪）

十月三日　於　誓得寺

本社十月例會は三日の夕刻より誓得寺で開かれた。葭乃女史の柳話は「作句の速度について」述べられた、鮎美君の前月句會の入選句概評は例によつて好評。續いて里十九君の披講擔任の相撲吟「拾ひ屋」は沒の句にも面白いのがあつた。各題秀逸句には粗品を進呈し、柳誌誓文拂の豫告があつて後閉會した。

出席者（順不同）

路郎・夕鐘・正路・一龜・湖秋・潮花・紫香・孤蓬・巨人・八櫻・寄與史・かほる・形水・亞鈍・銃人・滿潮・豆秋・凡太・鈴峯・鮎美・默平・某人・春巢・水虹・紅多呂・指洋・八九滿・一笑・里十九・いわを・菊郎・夢裡・葭乃・曉童

席題「百圓」　互選

鳴尾迄百圓札は無事だつた　八櫻
慰藉料に貰ふ百圓札の數　滿潮
臍くりが百圓となつて灯へ廻り　水虹
百圓は右から左へ通り拔け　一笑
百圓で鼻をかむ眞似して見せる　巨人
無雜作に百圓を出す出納部　紫香
百圓を儲けて雨に濡れてゐる　紅多呂
百圓札默つて持つて行けと云ふ　滿潮
百圓のつりをつかんだ菜つば服　潮花
もう百圓とる子を母のかばいよう　默平

席題「栗」　滿潮選

栗の枝持つてホームを降りて來る　紅多呂
いが栗を提げた男が遠慮せず　巨人
栗の毬都會の人に喜ばれ　春巢
教室で栗をコロリと落したり　豆秋
鷄と一處に起きて栗拾ふ　八九滿
名物の丹波の栗はほめてから　一龜
いが栗を弟子の故郷から送つて來　一笑
灰皿をうづめてしまふ栗の皮　同
栗を燒く匂ひ箕面は時雨する　潮花
栗すでにほころびかけて秋深む　夕鐘
氣がきいたつもりいが栗持つて行き　一笑
大阪の名所の橋で栗を燒き　豆秋
汽車の窓眞白い手が栗を買ひ　春巢
生ま燒けの栗をたべてる獨り者　紫香
燒栗を買つて驛前から登り　孤蓬
台所栗は西陽を受けてゐる　かほる
（秀）栗の皮女前齒でむいてくれ　春巢
（軸）支那栗を持たしてからの賴ひこと　滿潮

席題「投網」　默平選

投網打つ刹那をカメラ撮る氣なり　春巢
天高く投網を干して暮れかゝり　紅多呂
づつぷりと濡れて投網は引上げる　銃人
脊の高い幹事投網に用があり　かほる
朝からの雨に投網の濡れて立ち　鮎美
頃はよし投網見事に開いたり　巨人
投網打つ普橋の下から聞え　水虹
夕燒へ投網も唄になつてゐる　八九滿
磯の香が干した投網をもれて來る　一笑
鐵橋の汽車を投網はやりすごし　曉童
（人）投網いま皆獲りつくす姿なり　某人
（地）夕やけへ投網うれしく仕度する　一龜
（天）投網ようやく大物と云ふ腰を振り　寄與史

席題「番茶」　紫香選

勤勞の汗は番茶の味を知り　水虹
くだものゝあとの番茶を笑ひあひ　鮎美
水筒の番茶がうまい秋の山　豆秋
此の人なら二階借してもいゝ番茶　某人
應接間主人が番茶二杯飲み　春巢
恩人は番茶で良いと上つて來　曉童
背廣着て歸る息子に出す番茶　滿潮
まだ番茶冷えて殘つてゐる夜なべ　孤蓬
外人が番茶の味をほめて去に　水虹
菊作る父へ番茶を持つてゆき　滿潮
部屋住みへ番茶は黑い色で出る　潮花
冷めてから番茶を飲んだ女客　水虹
末席は澁い番茶を差し出され　銃人
子の寢顏番茶ふき吹きのんでゐる　鮎美
はしごから降りて番茶をよばれてゐ　滿潮
蔭膳の冷えた番茶を子は貰ひ　春巢
遠緣と話し番茶は冷えたまゝ　鮎美
（秀）番茶の茶柱が立つ朝の膳　巨人
（軸）お互の無事を番茶で祝ふなり　紫香

席題「老け役」　夕鐘選

老け役を買うて出る氣を淋しまれ　曉童
老け役の腰のあたりにする苦勞　八九滿
老け役へ若さの聲が物足らず　同
咳をして老け役舞台へかゝるなり　紫香
老け役の樂屋女將が待つてゐる　同
老け役のほくろは元のまゝで良し　寄與史
老け役の科白のまゝの半廻し　鮎美
老け役が背中を見せて殺される　滿潮
老け役が似合ふ女優となつて嫁し　潮花
老け役の案外金を溜めてゐる　紫香
老け役の上手へ座る座りだこ　鮎美
老け役が舞台の端で殺される　滿潮
（人）老け役の女男へ強く立ち　水虹
（地）老け役の目が下へ行く言葉尻　某人
（天）老け役へ老舗賣込む人が來る　默平
（軸）老け役の二重へかゝる股を取り　夕鐘

相撲吟「拾ひ屋」　互選

拾ひ屋とばかに出來ない金を持ち　鈴峯
拾ひ屋が一役買つて出た時局　水虹
拾ひ屋に召集が來たガード下　一笑
拾ひ屋の車寢られる樣に出來　かほる
拾ひ屋にまで統制がこたへて來　豆秋
市役所に勤め拾ひ屋とも云へず　紅多呂
拾ひ屋が休業してるきつい雨　夕鐘
ほがらかに拾ひ屋かつぐ炭俵　孤蓬
拾ひ屋をする氣で玄海灘を渡つた　正路
拾ひ屋へ子供が一人つきまとひ　紫香
宿替の今日拾ひ屋に覗かれる　寄與史
拾ひ屋の案外細い指を持ち　春巢
朝の陽をうけて拾ひ屋分けてゐる　滿潮
（優）運の好い拾ひ屋街を騷がせる　八九滿

兼題「地圖」　夢裡選

進軍の泥濘地圖に書いてなし　葉光
掛地圖へ一人世界を論じたり　紫香
イギリスに蝕ばまれてる地圖の色　形水
ポーランド儚なく消える地圖の色　亞鈍
交番は笑つて地圖へ丸をつけ　曉童
會議室地圖はくすんだまゝかゝり　紫香
沿線の地圖は遊ばす所ばかり　春巢
一滴の血と一枚の地圖還る　孤蓬
一本の鋲で危く支那の地圖　寄與史
（佳）針の手を止めニュースの地圖を引く　一龜
（佳）姉の瞳のなかで生きてる支那の地圖　潮花
（秀）案内の地圖は破れたまゝの秋　鮎美

兼題「孫」　路郎選

孫抱いて何にも慾のない姿　銃人
猫抱いて孫の世帶を覗きに來　豆秋

孫にだけ會うても良いと折れて來る　曉童
桐の花咲く頃孫は二十一　凡太
孫の出世に上京を強ひられる　夕鐘
愛孫と云うのが少し足らぬなり　巨人
孫だけが素人寫眞へ笑つてる　紅多呂
孫何時か香水ねだる樣になり　寄與史
孫の手で秋晴れを出る靈柩車　潮花
(人)將軍の孫に生れて文學士　湖秋
(地)恩給は子にも孫にもあてにされ　正路
(天)孫を抱くだけでは余るエネルギー　春巢
(軸)孫の手で兩替させる天王寺　路郎
(軸)中風の手から孫へ小遣　同

川雜　**廣島支部句會**（廣島）

九月十八日　於廣鐵局倶樂部
近藤須彌浩報

天作、三平兩氏を支那大陸に送る會

祖國、決心、品切れ、原稿、女事務

雪しとど國へ殘した子を憶ふ　秋史
祖國から母の便りは稻の出來　久米雄
皎々と照る月の下祖國思ふ　三郎
祖國から叫ぶ電波の懷しさ　白外郎
凱旋へ祖國は麥の香がきつい　久米雄
北斗星祖國の空をきめてくれ　秋史
戰友の墓標祖國へ向けて立て　かなめ
醉ひ矢張り祖國の唄になつてゐる　須彌浩
祖國今黃金に稻の實る秋　天作
難局へ決心のある底力　草雲子
決心がついて秋の日淸々し　三郎
決心へ座右銘を高く貼り　天國
決心がまだつかぬなり雨模樣　伯峯
決心の色眞劍に妻を說き　淸登詩
決心がついた女の眼のすわり　伯峯
決心を促す友も涙ぐみ　天國
決心を有耶無耶にしたのも女　久米雄
決心をして秋空へ深呼吸　伯峯
決心は無言のままで行く男　紫浪
決心の一歩一歩を踏みしめる　淸登詩
決心の眼に悠然と雲が居る　須彌浩
此の生地は無くなりますと洋服屋　秋史
バット品切又來る日を尋ねてる　白外郎
品切れの電話へ番頭よく喋べり　紫浪
賣り盡くし八百屋小唄のいい氣嫌　淸登詩
原稿紙澄み切る秋の窓を開け　久米雄
原稿を輕く飛ばした秋の風　白外郎
女事務知らん顏して文を讀み　雅水
女事務妙に澄まして夜店に居　麥作
女事務仕事が出來て嫁き後れ　天作
女事務體重が又ふえました　伯峯
慣れきつた算盤を手に女事務　草雲子
日曜の妻となつた女事務　久米雄
女事務男を信じ兼ねてゐる　同
女事務割引券を又貰ひ　秋史
女事務女心を置き忘れ　麥作
女事務未だ未だお嫁に行かない氣　かなめ
女事務第一日は無口なり　須彌浩
今日は又突飛な柄で女事務　かなめ
女事務辭めねばならぬ嬉しい日　草雲子
度の强い眼鏡で女事務は老け　秋史
女事務今日お別れと言ふ晴着　伯峯
女事務酒落を解せぬまま笑ひ　久米雄

除隊、氣持（十月十四日）

除隊して人生觀もちとかわり　伯峯
緊張の足らぬ銃後を除隊見る　須彌浩
除隊して上官へつい立止り　伯峯
除隊して軍隊用語親しまれ　久米雄
家の子は伍勤だそうな驛の旅　秋史
苦しかつたこと皆樂し除隊の日　須彌浩
門前に除隊の訓示長く聞き　紫浪
除隊した早起きへ母まだ寢てる　須彌浩
麥飯をつめこんで銃後の列に入り　千代香
春の野へ氣持の揃ふハイキング　天國
結婚を延したい氣を母知らず　千代香
出まかせの氣持を女給言つてのけ　同
傳へたい氣持が惑ふ無口なり　紫浪
この氣持まぎらはせたい爲の酒　伯峯
激論のなぐる氣持になつて來る　久米雄
はつきりと除隊の氣持言へますか　千代香
氣持だけですと社員の妻が來る　須彌浩
母の氣へ娘は不斷着で輕う立ち　秋史
そぐはない氣持二人へ辻がくる　久米雄
前科まだ呪ふ氣持を捨てきれず　同
秋の花秋の氣持になつて活け　同
一徹な氣持を酒にからかはれ　秋史
上役の氣持になつて言ひ負ける　久米雄

川雜　**北大阪、港支部句會**（大阪）

九月三十日　於水客居

水客氏嚴父追悼

弔電、面影、蠟燭、命日

早口に幹事弔電讀みあげる　綠水
弔電はしめりきつたる中へ來る　潮花
黑わくの電文秋の陽にまぶし　水客
嘘のない心弔電長くなる　水坊
佛壇へ置く弔電の數さみし　秋子
弔電ですませる樣なとこに住み　湖秋
弔電へ淋しく秋の風があり　潮花
弔電を取次ぐだけの役に出來　水客
弔電が出棺前にとゞいて來　一笑
弔電へ母はうなづく許りなり　紫香
肩書の順で弔電讀まれてゐ　同
眼をとじてその面影をなくすまひ　水客
萩生けて師の面影と共にゐる　水坊
ふと君の面影が浮く並木道　紫香
赤トンボ子の面影が雲に浮く　水客
面影がまだある空のあたゝかさ　綠水
面影がおぼろに殘る鏡懸け　潮花
ろうそくの光へ母の背が働き　紫香
ろうそくを姉やはらかく消してゐる　水坊
ろうそくを踏んで冷たき豫感する　水客
蠟燭の暗さ電氣がついて知り　一笑
菜園の花切る母の御命日　潮花
命日に一年ぶりの姉と逢ひ　紫香
御命日あゝ南昌が眼に浮ぶ　潮花
男に生れ命日忘れ勝ち　湖秋
命日へ小さく後妻坐るなり　紫香
命日へ小さき子供も來て坐り　湖秋
御命日母の手にせる蓮かたし　秋子
命日と云ふ日小犬が戲れる　水坊
詰襟の若さで坐る御命日　潮花
ひがんばな細き雨降る佛の日　水客
命日をうつかり嫁に敎へられ　同
子を抱いて出れば泌々いゝ月夜　同
月明り一筋白き道を踏む　潮花
月の出を看護婦さんに敎へられ　水客
宿の風呂いつそ氣樂な一人旅　一笑
ふと下車をする氣になつた一人旅　紫香
こないだの禮が手間取る親同志　水客
午前二時、母親だけが起きて呉れ　紫香
丸木橋父が最初に渡るなり　同
兩の降ることさへ親の氣にかゝり　水客
嫁がせて母は淋しい灯に坐り　潮花
留守番は矢張り母がして呉れる　紫香

川雜　**今治支部句會**（今治）

柳翁忌　九月二十三日　長野文庫報

百五十、盛衰、双肩

百五十の直線コース秋晴れる　曉童
月は星はめぐり百五十回の秋　同
百五十才生きた例あり古事記傳　文庫
百五十圓の盆栽只の松　同
百五十番鏡台が當つた獨り者　向上庵
百五十もう石段がいやになり　同
盛んだつた頃は女も居つた會　曉童
盛衰もなく平社員で死に　文庫

繁昌の店の近所の店仕舞　向上庵
父の亡い責任感へ生き拔いて　曉童
郷土の名双肩にして負けられず　文庫
双肩の星が勳功持つて居る　向上庵
百五十回忌の秋や道無窮　曉童
百五十年目以外な數になり　文庫

川・雜
梅田支部　**かほる賞句會**（大阪）

植木市

水かけて〳〵まけない植木市　由布
植木市蕾のまゝを高く云ひ　鮎美
花散つて實が成つてゐる植木市　同
ひやかしてゐて賑かな植木市　靜波
噴霧器の虹がはかない植木市　秀峰
大鉢は夕べのまゝの植木市　由布
尼寺の塀が青々と植木市　鮎美
植木市賣れずに晝の月があり　同

川雜　**下關支部句會**（下關）

八月六日・三十日　多田市多樓報
於　市多樓居

痛手、蔭膳、金魚賣り、花火、
札付き、遠慮、口、提灯、水泳
怪我

堂島の痛手を知らす電話口　九呂平
世の中が知れましたとは痛手受け　市多樓
子に希望つないで痛手立直り　不川
金と言ふ痛手へ媚びる酒を出し　米三
手をひろげ過ぎて故郷の山を賣り　草路
蔭膳へ情のこもる皿の數　恐錢
蔭膳へ今日は良人の好きなもの　柳月
蔭膳へ慰めに來る里の母　暢爺
蔭膳の蠅が氣になる澁團扇　芥兆
賣れそうな場所で金魚屋荷をおろし　のぼる
金魚賣りまづ汗を拭き蓋を取り　市多樓
金魚賣り特徴のある聲で呼び　柳月
二三匹まけて金魚賣りしまい　白陽子
金魚賣り一匹添へて貰ひ水　九呂平
斷水へ面ふくらした金魚賣り　暢爺
どの足も花火へ急ぐアスファルト　芥兆

車座の線香花火に顔が浮き　九呂平
煙火師の子等も見てゐる河開き　恐錢
いたづらの花火へ娘派手に逃げ　双龍
末の子も仙香花火持ちたがり　市多樓
宿題を花火の音に投げて立ち　暢爺
美しい花火盲の父淋し　草路
札付きをあれも道具とボリは云ひ　九呂平
札付きと云はれて世間せまく生き　双龍
札付きと云はれた頃の友と合ひ　白陽子
札付きの師匠手馴れた顔で來る　芥兆
札付きは世の裏道を歩くなり　文福
札付きが名譽の戰死したニュース　のぼる
札付きの後へ刑事は見えかくれ　草路

特別募集

題・「迎年祈世」五句以内
われら赤子のまごゝろをお詠み下さい。
選・麻生路郎先生
用紙不問・天地人佳作呈賞
締切十一月廿日・發表「このみ」一月號
大阪市東成區南中本町二丁目一一九
このみ川柳會

惡友と切れず墓場の赤い土　白陽子
札付きの娘に出來すぎた慰問文　市多樓
遠慮してはいつた風呂に風を引き　きくの
遠慮して戻つて雨をのがれたり　市多樓
遠慮せぬ子供を母は窘める　柳月
遠慮した歸りを腹が承知せず　暢爺
不遠慮を賣物にして箸をとり　九呂平
ゆける口先は上座へすゑられる　秋吉
職業を持つて居るのか口の紅　ハツミ
先づ口を拭つて香具師は交代し　岡藤市
口笛がすゝきの中へ消えて行く　代志久
口先が何か云ひたい顔の色　柳月
寢不足は顔一杯の口になり　九呂平
公休へ妻の無口が物足らず　暢爺
惡口が知れて氣まづい友となり　柳月
口丈の拔巧で生きる酒を酌ぎ　不川

提灯へ介添の要る嫁御寮　九呂平
提灯だけ歩いてるような闇の夜　柳月
萬歲萬歲紅提灯の渦が卷き　暢爺
夜の醫者へ呼吸せき切つて小提灯　不川
遠見する提灯頭の上で持ち　九呂平
提灯へ馬が戻つた水を汲み　不川
浮袋彼女は磯で嘲笑ふ　暢爺
子の夢はクロールしてる蚊帳の中　不水
いり豆もほとびて泳ぎ疲れてゐ　市多樓
ダイビング朝陽正に島に映ゆ　同
水泳を知らない母の脫衣番　柳月
斥候の泳いで渡る星明り　暢爺
渡河戰に一番乘りの腕を見せ　不水
新妻の趣味水泳とは勝ち氣　市多樓
水泳にニッポンと云ふ國があり　暢爺
今年で三人目と云ふ淵で水泳ぐ　勇記
水泳着昨日と同じ型にやけ　九呂平
水泳へ豫備體操の長い事　落花
海女の息思はぬ處へ浮き上り　不川
叱られる事を承知で子は泳ぎ　市多樓
漣に浮ぶ人魚の白蠟美　比呂志
濱寺は今午後三時人の數　不水
水泳の子を戒める溺死記事　不川
水泳へ母繰返し〳〵　柳月
遠淺へ河童四五人暮れ殘り　不川
母の手の溫みへ輕く水を跳ね　九呂平
別な氣で巡査裸と話し合ひ　米三
見限つた怪我にも醫者の待ち遠し　市多樓
外科を出る怪我は急所を外れてる　九呂平
急停車まではつきり意識する　不川
疵口を出しあの時の事にふれ　九呂平
これしきの怪我仲良しの我慢する　市多樓
メスの手が必死の聲に躊躇せり　九呂平
末つ娘の怪我を兄弟して起し　不水
繃帶の量で解らぬ怪我でありタ飯へ生血のまゝの子が強い　哲志
繃帶の中で瀕死は何か云ひ　不水
旅の宿こゝも戰傷兵の宿　柳月
怪我さした話女は眞顏なり　市多樓
女房の怪我は叱つた丈で濟み　同
水客

松坂倶樂部句會（大阪）

十月一日　石井白面人報

人出、雨、富士

千日は人出に馴れた子が遊び　くもを
この人出塒は持つてゐるかしら　生々庵
ゑらい人やなと自分は勘定に入れてゐず　同
なにしにか僕も知らない新世界　孤蓬
見たい聽きたい飲みたい食べたい歩いてる　同
盛り場の人出の中に立つ二人　美根子
揚げざるのどぜうの樣なこの人出　同
流される樣に人出の中を行き　耕二
しもた家は人出窓からのぞいてゐ　同
あてもなく人出の中をまだ歩き　白面人
不運にも人出の中で見付けられ　同
雜踏へ振り返へらせて女來る　同
押されながら人出の中で拾ひもの　路郎
讀書人こんな人出に押されても　同
背の低くさはつきり知つた人出なり　同
日曜が雨で薄給救はれる　美根子

懸賞

誌友倍加運動

本誌は聖戰下の趣味陣營にあつて素晴らしい發展を續けつゝあります。
東洋永遠の平和を確保する長期建設に際し、外地は云うに及ばず內地に於ても如何に笑ひを要求し如何に超脫朗笑的な趣味に渴仰しつゝあるか想像に難くないのであります。
本誌は茲に見るところあり、これ等の渴を長足に醫するため左記規定により誌友の懸賞倍加運動を開始しました。振つて御參加御援助下さるやう願上げます。

新誌友應募規定

☆誌友たるの資格は「川柳雜誌」一ヶ年分三圓六十錢を前金にてお拂ひ込みの方に限ります。
☆誌友を一名御紹介下すつた方には抽籤券を一枚、二人御紹介下すつた方には二枚、以上これに順じて抽籤券を差上げます。

我が家ほどよいものはなし雨の音　同
雨少し止んで子供は承知せず　耕二
雨の日は雨でうれしく子は歌ひ　同
雨やどり女だんだんこはくなり　くもを
慈雨と云ふ世界を子等は知らざりき　同
竹トンボ今度は雨の中へ飛び　同
一粒づゝ頂くやうに雨を待ち　生々庵
春雨の味俗人にのみこめず　同
大雷雨虹一本を置いて去に　孤蓬
道寄りをかくし切れない雨が降り　同
日曜の午後は雨でも見てゐやう　同
桶狭間雨は斜に突つ走り　同
電報でも來そう宵から降り止まず　同
立ん坊が雨へ笑ひを融けこます　同

富士山麓にて

こゝに來てつくづく富士は日本一　耕二
嘘でよいもそつと富士の上を行け　くもを
應揚に富士を見てゐる一等車　同
雪のない富士を車窓に暑く見る　美根子
新婚は車窓の富士へ話しかけ　同

寢台車にて

眠り目の窓にひよつこり富士お來て　生々庵
子供より母あちやんが富士ですよ〳〵　同
まあ委かして置けよと云つた富士の顔　同
富士の見える部屋をアパート高く貸し　白面人
大佛に呆れ富士には肅とする　同
陳情の歸りに富士を見て通り　同
日本の行途は一つ富士が晴れ　同
下甲板富士へ騒がぬ孤兒が居る　孤蓬
鐵齊の落欵富士は見直され　同
廣重の富士横文字の一頁　同
富士を背に寫されてゐるお嬢さん　同

有恒川柳會（大阪）

九月廿八日　於有恒倶樂部　寺井鋭々報

月見、伊達卷、先代

名月へ泣いた時代を思ひ出し　平三
殘業組靜かならざる月見をし　羅漢
名月はもう寢た屋根の上で冴え　鋭々
郊外に住んで二十日の月を見る　行三
久しぶりの月見病後がさせてくれ　至藝瑠
末席がつく〴〵月を觀て歸り　路郎
伊達卷を盗んで歸る不屈さ　平三
湯上りの伊達卷姿誰を待つ　羅漢
伊達卷となつて女はよく喋り　鋭々
伊達卷へ宿の齒揚子堅すぎる　同
人絹の伊達卷ほどけ易いこと　行三
あちら育ちが伊達卷を持て餘し　同
後添がした伊達卷は似合つて居　至藝瑠
子寶が出來て伊達卷平氣なり　同
伊達卷に氣易く水を所望され　路郎
伊達卷でゐて叱られる年になり　同

懸賞川柳

課題「飛ぶ」十一月十日
「耳」十二月十日
用紙は官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）選者麻生路郎氏
秀逸數句に謝謝を呈す
宛先　堺市出島町三五一番地
麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

先代の偉さへ合はぬ僕の主義　朴堂
先代のひいきと言ふが賴つて來　同
先代の衣鉢ます〳〵しぶくなり　同
先代の趣味へ紙屑屋の値踏み　同
先代のえらさ知らぬは息子だけ　至藝瑠
先代のたのんだけりは養子つけ　同
先代の墓は大きく光つて居　同
其の當座先代のこと言ひにくる　同
傳記だけ殘して先代こまらせる　同
先代が惡いとなつて無事にすみ　同
先代の惡いとこだけ繼いで居る　雨月
先代の天秤棒が床にあり　同
淨瑠璃が出て先代の事となり　鋭々
先代の癖が上手な丁稚ゐる　同
先代の女話もちよつと出る　同
先代は裸踊もして儲け　路郎

十月十二日

すれ違ひ、第三者、夕刊

すれ違ひア、あの人も老けはつた　波夢造
すれ違ふ匂ひ素性を現はして　同
禁煙の場所で社長にすれ違ひ　至藝瑠
すれ違ひだけですませた友が死に　同
行きづりの瞳が氣になつた春の夜　鋭々
すれ違ひあれは社長の女らし　同
すれ違ふたのんにうかめてなはつたナア　同
すれ違ひ小旗振り〳〵頭下げ　平三
興奮もせず第三者散つて行き　波夢造
第三者都合で一役買ふつもり　同
第三者ですと意見も吐いてゐる　至藝瑠
火がついて來て第三者思ひ知り　同
第三者の樣な顏して逃げる氣か　同
講談の樣に聞いてる第三者　鋭々
第三者少し女へ同情し　平三
第三者毎度の事で取り合はず　雨月
夕刊を二人でのぞく仲のよさ　平三
夕刊を顏に狸寢してすねる　同
夕刊を讀み〳〵片手守をする　同
夕刊で知つてくやみに馳けつける　同
乘越は夕刊讀んで居らぬなり　至藝瑠
夕刊をお譜へ置いて待たす氣か　同
三度目の聲に夕刊すてゝ立ち　同
夕刊を寢間で讀んでる二日醉　同
久し振りの夕刊子供讀ませない　同
穴のあいた靴下と夕刊と　路郎

病中吟

此の秋は拔毛の量も合點する　波夢造
わびしさや氷砂糖を齒に當てる　同
粉藥のついでに花に水をさし　同
見舞客歸りに鰻食ふと言ふ　同

川柳はざくら句會（大阪）

九月二十四日　於寶塚新溫泉　今西湖秋報

初秋、車窓、娘、雜吟

軍事便戰地の秋が書かれてゐ　添萬
初秋の窓いつぱいに稻みのる　鈴峯
初秋の夕陽二人の背を染め　月都
初秋の山あかがね色に暮れ　潮花
車窓よりふるハンカチの白い宵　月都
車窓皆顏々々の貸切車　鈴峯
緣談へ娘小さく來て座り　南風
夢に見た娘に會へそうな寶塚　鈴峯
お針娘のかへり道々よくしやべり　靜子
うたがはれるほどに娘はかざり立て　湖秋
嫁ぐ日が近く娘の髮のつや　同
釣革へ娘の腕の白い宵　一房
逢へばすむ娘心へ秋の風　秋子
打ち解けて臭れぬ義妹が美しい　潮花
ハイキング土產の花はしなびて居　南風
愛人と同じ夕陽を見つめてゐ　添萬
十八九、女工へ淡い戀を抱き　潮花

大阪鐵道病院川柳會（大阪）

十月十三日　於大阪鐵道病院醫局

下足札、櫛、胡坐、終點、嵐、往診・背骨

病院で兒が持たされた下足札　水虹
下足札靴が無殘に括られる　嘘川
下足札キチンと棚に畫の風呂　紅多呂

☆誌友希望の方は自己推薦として一ヶ年分前金にてお申込み下さい。

☆誌代のお拂込みは小爲替又は振替口座大阪七五〇五〇番を御利用下さい。そして小爲替の方は紹介者名及び誌友名を御明記のこと、振替の方は通信文欄に紹介者名及び誌友名を御明記下さい。

☆誌友の御紹介は幾人でも結構でございます。その御紹介の人數丈け抽籤券を差上げます。

☆抽籤は建國二千六百年の二月十一日本社に於て嚴正に執行いたします。

（發表は昭和十五年三月號）

賞品

一等　桐箱入川柳掛軸（麻生路郎揮毫）　一幅　一名
二等　川柳横額（同）　一枚宛　二名
三等　川柳短册（同）　一葉宛　三十名
四等　投句用箋　一册宛　殘り全部

川柳雜誌社

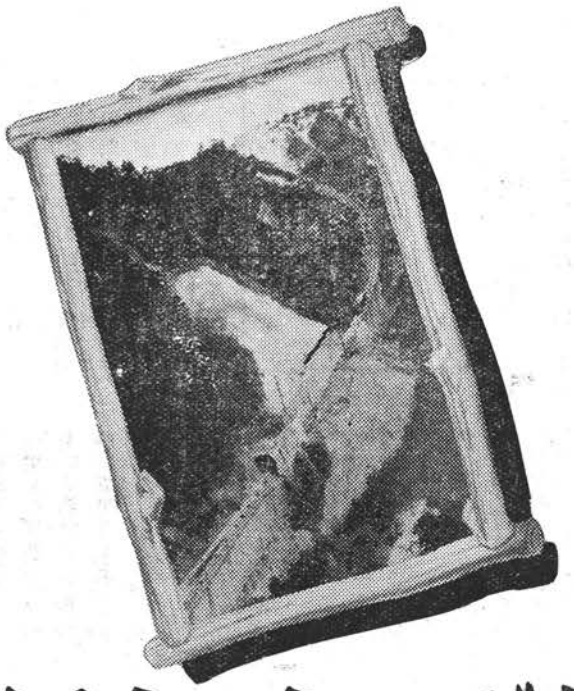
髭生やしたのが持たされる下足札
下足札一足先きに去ぬつもり　萬的
時間通り來て一番の下足札　水客
寺の灸下足の札の字が見えず　春巣
下足札こんな下駄とは思へども　某人
膝枕妓小さい櫛を出し　曉童
毛のついた宿屋の櫛に手も觸れず　嘘川
子に櫛を持たして夫婦仲がよし　同
階段に落ちてる櫛をよけて降り　水客
これからが本當に飲む胡坐かき　同
胡坐して見てもつまらぬ留守の晝　紅多呂
二十貫言譯言うて胡坐くむ　幸路
子を褒めてやれば胡坐の上へ來る　春巣
胡坐かく序に時計出して見る　萬的
いゝ便り胡坐になつて封を切り　久枝
終點へ湯の宿があり海の音　水客
終點の雨夕刊につめ寄られ　桐
終點へ五六丁ある新世帶　某人
終點はネオンの裾が消えて見え　嘘川
終點へ來て乘り越した事を知り　萬的
此の人を終點迄とことづかり　五月
終點はまだか〳〵とバスケット　空頭
終點の近くで二階借つてゐる　春巣
終點ですと車掌は驛の名を言はず　紅多呂
終點へ來てから二人未だ歩き　久枝
曲り角終點となる汽車ごつこ　水客
終點が近く青葉が眼にしみる　幸路
終點のすし屋の折で間に合せ　水客
終點の風はまへすぐ海から來　春巣
終點へ合資會社と言ふが出來　某人
大嵐隱居の丹精持つて逃げ　嘘川
麻雀の歸り嵐となつて更け　骨減
嵐すぎ垣根に寄つた紙の屑　嘘川
病院は嵐の中へ高く立ち　空頭
ラヂオだけ騒いで嵐やつて來ず　曉童
佛檀の部屋で嵐を聞いて寢る　水虹
嵐の夜こほろぎ一つ部屋に居る　春巣
書置へ丁度嵐になつて來る　野分
暴風へとも角降りて見る釣師　水客
ダンサーが窓へ並んだ嵐の夜　某人
往診へ聲を殺して出迎へる　萬的
往診も風邪か濕布のまゝで來る　某人
往診の車女を振り返り　曉童
往診は露地の口から歩かされ　春巣
往診の腰がにぢつた聽診器　某人
往診が手後れらしい門へ着き　久枝
往診へ隣の女房口を出し　嘘川
弓なりの脊骨名人と呼ばる頃　桐
鮎の脊骨拔いてゐる間を見下され　同

よつばし川柳會（大阪）

橋本綠雨報

月給、惡友

同期生又月給の話なり　丹生
月給日青樓の女將に訪ねられ　吉現
月給の端錢子供の下駄になり　飛鶴
月給を貰つて矢張り足らぬなり　一重
お隣の月給妻は聞いて來る　旗風
始めての月給袋母に見せ　茶目坊
月給の袋女將は見のがさず　無名氏
割り當てゝ見ても月給足らぬなり　糸柳
約束がこの月給に多すぎる　秀峰
月給が上つてからとあきらめる　翠芳
月給をあて込む人の數多き　聲香
昇給をしたと袋のまゝ渡し　綠雨
月給が安い〳〵となまけて居　朗舟
月給日禁酒と云ふをあぶながり　靜峰
緣談は月給の事云ひ添へる　保郎
月給を貰つたらしい土産物　常法
今少し樂しい筈の月給日　古憧
月給のその翌日はめかしてる　秀甫
藥代になる月給のうらめしく　輝翠
月給も家賃もは入るよい生活　芳人
月給が安くて戀に破れけり　秋意
月給は僅か拂ひは右左　芦穗
月給に放れ呑氣な菊作り　同
惡友とした約束は無駄になり　喜多龜
交際つた後惡友に拂はされ　素人
惡友に誓つた言葉氣にかゝり　小雨
惡友に非常時局を解きたてる　秀甫
惡友を今日は見上げた赤だすき　夢想
惡友をみんなだまして一人行く　吉現
召集に腥めて惡友いさぎよし　壽堂
惡友は上手にボンチ誘ひ出し　京三
惡友も分別顏の父になり　旗風
だらしない態で惡友誘いに來　保郎
惡友はどんな遊びも知つて居り　秋意
惡友の父に祕密を尋ねられ　糸柳
惡友に手を合されて質に置き　朗舟
逃げられぬ樣に惡友話しかけ　綠雨
タクシーを停めて惡友先に乘り　芳人
惡友の顏が揃つた三次會　芦穗
惡友は見せ金をして誘ひに來　綠雨
惡友のニックネームで親しまれ　芳人
惡友は尖端を行く姿なり　芦穗
惡友は智慧でかためた嘘を云ひ　輝翠
惡友へ警告をする年となり　同



六甲山へケーブルで

御便利な

六甲ケーブル連絡券（新在家連絡）

大阪より　往復　1円35錢　小兒　68錢
神戸より　往復　94錢　小兒　47錢

（連絡券の復券でロープウエーにも乘れます）

阪神電車

社關係の人々（いろは順）

主幹
麻生路郎

賛助員
池澤一郎　長谷川雄一　大道弘平　岡本一徹　片岡直方　笠原路生　納純二　嘉田中辰　長崎柳秀　長岡牛太郎　長野晴作　藤本卯之助　藤村作　顯原退藏

客員
浅田末弘　前田雀一　大谷五郎　沖野岩三郎　亀井晟　鳥山一歩　川上三太郎　川村花菱　米村孝之介　田谷敏雄　高尾亮　山本雨　窪田銀波樓　安川久留美　前田五郎　柴谷宰二　篠原春雨　蛇子雀二　藤里好古　小林不滇　森東魚　高澤一滇　高橋かほる　本橋雨　不朽洞會員　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　石井白面人　★北山悟　市村姫夢　堺没食子　吉田水鐘　須崎豆秋　尾八九　春元紀太　松下小柳　西わを　後藤いく　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客　黒川紫香　丸尾潮花　大坂形水　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　増元翠陽　田井邊由布　酒井斗居　天野風　北川春巣

支部と幹事

道頓堀支部（大阪市）　庄萬よし
九三會支部（大阪市）　北山悟郎
函館支部（函館市）　亀井晟修
高知支部（高知市）　國澤春水
梅田支部（大阪市）　水谷鮎美
鍵川支部（島根縣）　尼綠之助
鳥取支部（鳥取市）　中島鐵州
松山支部（松山市）　矢野虻之麿
天王寺支部（大阪市）　妹尾八九滿
鶴町支部（大阪市）　岩橋双虎
御池橋支部（大阪市）　西いわを
松江支部（松江市）　勝谷山川皃
大鐵局支部（大阪市）　正本水客
西條支部（愛媛縣）　荒井英賀夫
今里支部（大阪市）　市塲没食子
今治支部（今治市）　長野文庫
光笑會（大阪市）　永田里十九
竹原支部（廣島縣）　黒本芳泉
十三支部（大阪市）　淺野牧人
兵庫支部（神戸市）　三崎陽幸
廣島支部（廣島市）　濱田久米雄
名古屋支部（名古屋市）　吉田水草
北大阪支部（豐中市）　黒川紫香
港支部（大阪市）　多田一波
下關支部（下關市）　多田市多樓
北鮮支部（清津府）　三鴨美笑
蒙疆支部（張家口）　岩崎柳路
上海支部（中華）　植山九天

記後

★★★★★★★★★

▼近米本誌の躍進振りは目覺ましい。増ページ、増刷で編輯、營業共に多忙を極めてゐる。その中へ、「柳誌の誓文拝」と、同情週間の師走川柳大會を矢繊早やに開かうと云ふのであるからおして知るべきだ。

▼本號發表の月評川柳一ト筋のあつまりをフランス茶房の階上で開らく。超滿員で人氣白熱だ。この調子では近く月評の二部制を布かねばなるまい。

▼「武玉川三篇研究」がいよ〳〵本號で完了した。發表に三十五ケ月かゝつた。初篇から通算すれば七ケ年かゝつてゐる。ニッポン號の世界一周も尊いが、斯うしたすこぶる地味な仕事への努力は更に〳〵尊いと思ふ。次號からは四篇研究を發表する。御愛讀をお願ひする。

▼本號から「社會ページ」の欄を新設した。これは世相の批判を主とし、報道と警告を從とした。新聞が目をふさいで書かない事へも觸れてゆきたいと思つてゐる。讀者からも、いゝ材料の提供を切望する。

▼「雑文と研究のページ」は岡田某人氏の「貝鈔」の續稿並びに、小山文三氏の「隨筆リボンと戰爭其他」、福田山雨樓氏の「AとBの話」、弘津柳慶氏の「朝鮮雑記」、大西八歩氏の「忘れられたハンカチ」、高橋かほる氏の「街に住めば」と拙稿「川柳類題と例句」で、すこぶる盛り澤山である。

▼その他、池澤丈雄氏の「プロムブター」、植山九天氏の「上海だより」、ゑい氏の「月評會スナップ」等がある。

▼巻頭に掲げた宮岡白峯氏の「木蔭の走りがき」は原稿遲着のため黍節外づれで迫力を少からず減殺する憾らみがないでもないが陣中の寸暇を惜しんで執筆されたものをむざ〳〵葬りる譯にも行かないので發表した。筆者並びに讀者の寛恕を請ふ。

▼北みきを氏の「漫畫陣中鏡」の續稿が續々到着、その中から卷頭發表の傑作を見た。

▼新春號を年内に發行したいので創作、課題吟、原稿等何れも締切日を繰上げたので特に留意されたい。

（路郎）

募集

第十六巻　第十二號課題

十一月十日締切
（十句以内）

番傘　高橋かほる選
別荘　寺井鋭々選

第十七巻　第一號課題

十二月五日締切
（十句以内）

三ケ日　須崎豆秋選
屏風　姫田夕鐘選

毎號募集（締切毎月五日）

近作柳樽（雑吟廿句）　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雑吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雑誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は厳守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一部　金三十錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

昭和十四年十一月一〇日印刷
昭和十四年十一月十五日發行

第十六巻　第十一號
（毎月一回十五日發行）

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
川柳雑誌社
電話土佐堀（三三三三番）（八一六三番）（八一六四番）
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載
新證保有は行刊の誌本は法紙證據る

賣捌書店

（大阪）参文社　三越書籍部　明文堂　朝日ビル書店
其他市内各書店（東京）東京堂　厳松堂　吉岡書店
玉森堂　紀伊國屋　三昧堂（神戸）米田寶文館（函館）
石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
昭和十四年十一月十日印刷納本　昭和十四年十一月十五日發行

川柳雜誌　NO・190　定價金30錢　送料壹錢

ニキビ

りとびきに

美顔水

吹出物にニキビ此薬を

ニキビ吹出物に非常によく効きますので大評判の薬です。ぜヒお勵めしたい薬！

美容薬としても

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗面後等にお用ひになるととても爽快で、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増しお顔がスッキリと美しくなるので美容薬としても盛んに愛用せられてゐます。

蚤蚊南京虫其の他毒虫てカユイ時にもとても便利な薬！

アブラ顔のお化粧下に最適！

化粧用美顔水